



Shoun 2019 March
Shimane University Library Bulletin



JAPANESE BARBERS

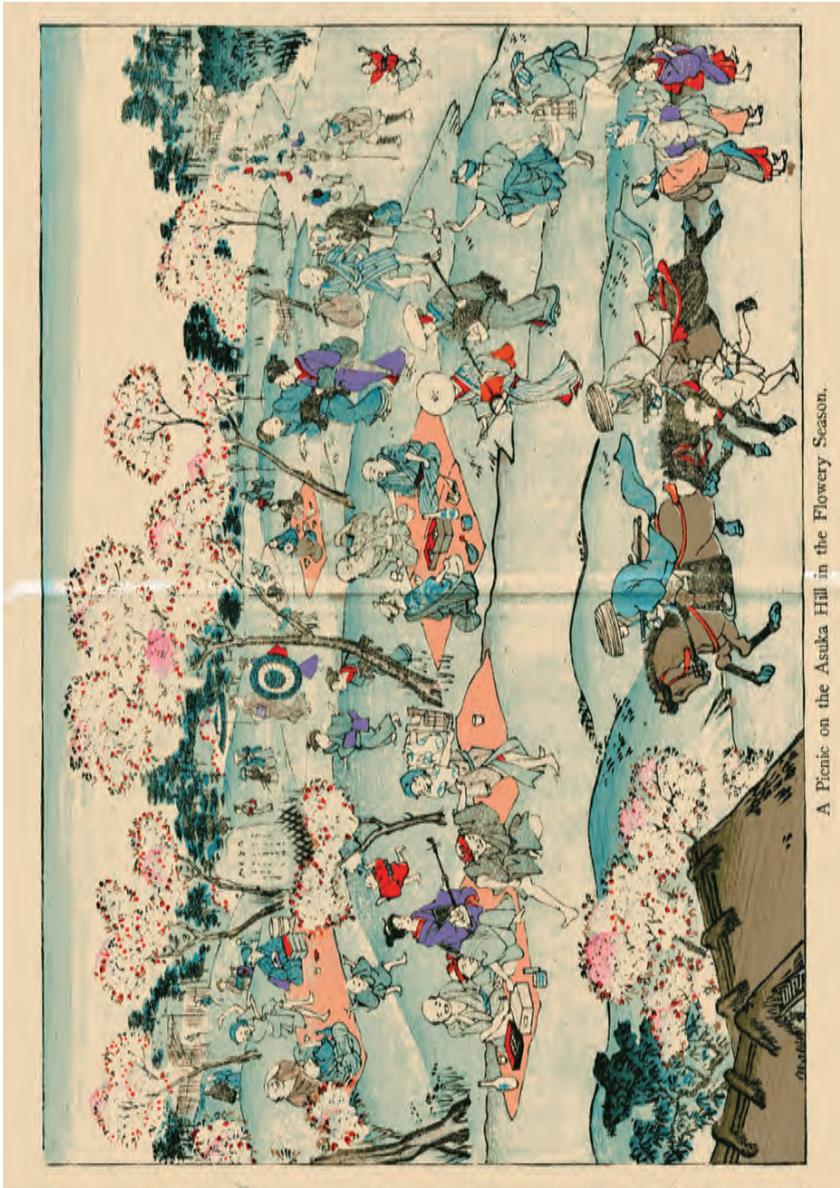
日本の理髪師
Japan and the Japanese Illustrated by Aimé Humbert c1874より
(医学図書館西東文庫所蔵)

《報告》

- 西東文庫企画展示 山崎 月子
- 大学図書館におけるAR(拡張現実)を使用した
展示の試み 三村のぞみ
- 「戦争と平和を考える2018-永井隆と平和への
思い-」実施報告 小林奈緒子

《本学教員関わった本》

田中則雄・福井栄二郎・福田哲之・高橋絵里奈



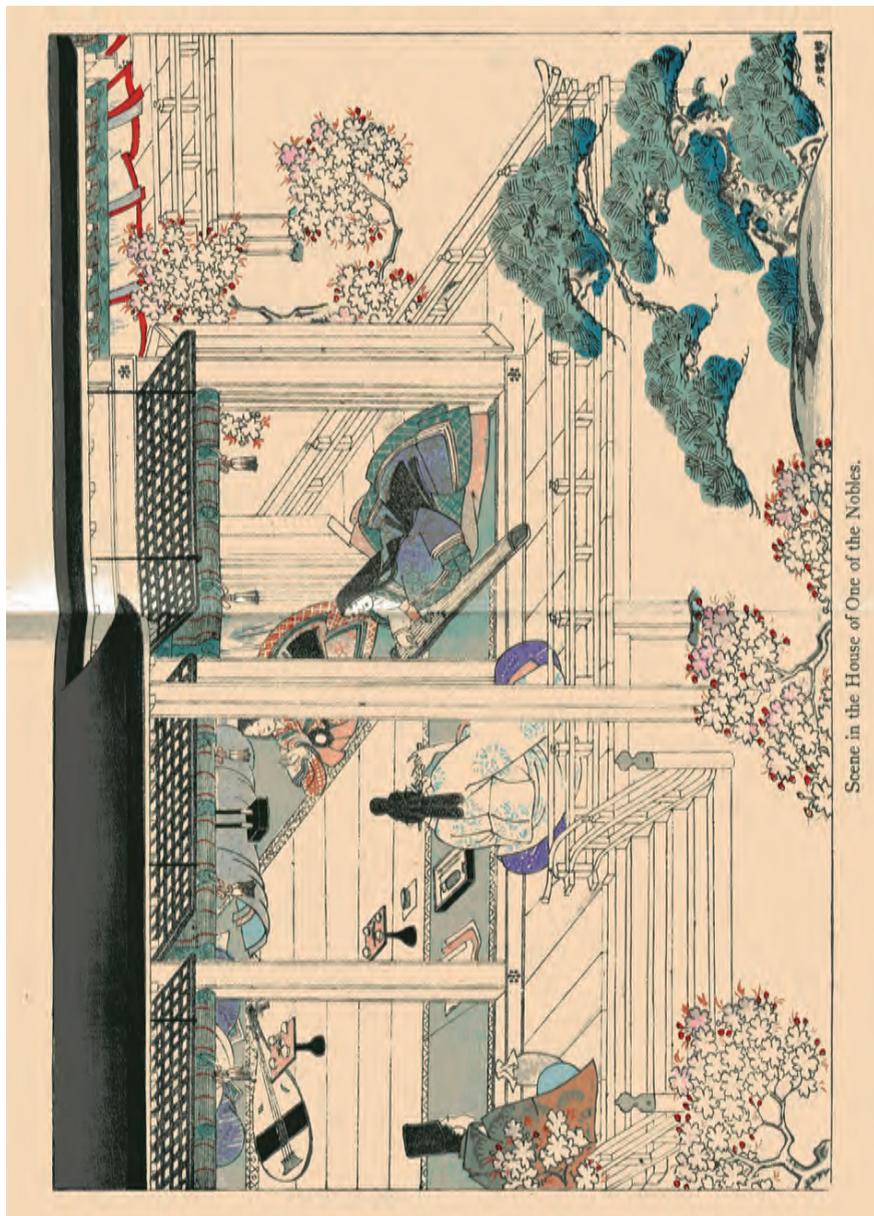
A Picnic on the Asuka Hill in the Flowery Season.

木邨（村）徳太郎 作

History of the Empire of Japan c1893^(※)より

(医学図書館西東文庫所蔵)

※World's Columbian Expositionの日本当局から依頼されて、文部省（当時）が編集したもの



木邨（村）徳太郎 作

History of the Empire of Japan c1893より

(医学図書館西東文庫所蔵)

松雲

第21号 2019.3.25 発行

《報告》

西東文庫企画展示

- 「イラストでたどる西洋人の見た明治初期の日本」を開催して… 山崎 月子 4
大学図書館におけるAR（拡張現実）を使用した展示の試み
—「AR和歌展」実施報告— …………… 三村のぞみ 22
「戦争と平和を考える2018—永井隆と平和への思い—」実施報告
…………… 小林奈緒子 35

《本学教員が関わった本》

山陰研究ブックレット7 地域とつながる人文学の挑戦：

- 山陰の文学・歴史学・考古学研究から考える …………… 田中 則雄 52
世界の暦文化事典…………… 福井栄二郎 55
清華簡研究…………… 福田 哲之 58
森林美学…………… 高橋絵里奈 61
-

西東文庫企画展示

「イラストでたどる西洋人の見た明治初期の日本」を開催して

島根大学企画部図書情報課医学情報グループ 山崎 月子

1. はじめに

「西東文庫」は、Westernization of Japan（江戸から東京へ：西洋から見た日本の近代化）をテーマとした資料827冊からなるコレクションである（表1）。島根大学附属図書館医学図書館（以下、医学図書館とする）が島根医科大学附属図書館であった1988（昭和63）年、文部省（当時）大型コレクション¹⁾として収蔵され、その大部分は、1800年代後半から1900年代前半に出版されたものである。Rutherford Alcock の『The capital of the Tycoon（大君の都）』、Ruth Benedict の『The chrysanthemum and the sword（菊と刀）』ほか、Lafcadio HearnやBayard Taylor、Mortimer Menpesなどの初版本も多い。資料のほとんどは、日本を訪れた西洋人が記述したもので、内容は歴史、地理、宗教、社会制度、風俗習慣など多岐にわたっている。美しいイラスト、版画等の挿絵や古写真を載せたものも多く、民俗学的にも大変興味深い資料と言えるだろう。

文庫名は、ゲーテの『West-östlicher Divan（西東詩集）』²⁾に因んで命名され、2009（平成21）年度からは附属図書館研究開発室³⁾の事業の一つとして、その調査・研究を行っている。これまでの主な活動は、表2のとおりである。



図1 西東文庫収蔵の『Japan and the Japanese : illustrated / Aimé Humbert 1874』より

表1 西東文庫資料内訳

出版年		分類		本文言語	
年代	冊数	分野(日本十進分類)	冊数	言語	冊数
1850年代(嘉永3～安政6)	9	総記	2	英語	732
1860年代(万延元～明治2)	15	哲学・宗教	22	フランス語	48
1870年代(明治3～明治12)	31	歴史・地理・紀行	419	ドイツ語	16
1880年代(明治13～明治22)	23	社会科学	122	ポルトガル語	24
1890年代(明治23～明治32)	51	自然科学	4	日本語(英語併記)	3
1900年代(明治33～明治42)	150	技術・工学・工業	7	イタリア語	2
1910年代(明治43～大正8)	65	産業	9	ノルウェー語	2
1920年代(大正9～昭和4)	71	芸術	64		
1930年代(昭和5～昭和14)	121	語学	22		
1940年代(昭和15～昭和24)	59	文学	156		
1950年代以降(昭和25以降)	228				
年代不詳	4				

しかし、この「西東文庫」については、これまであまり公開してこなかったためだと思われるが、学内でもその存在を知っている人が少ない。そこで、「西東文庫」の資料価値を広く知ってもらうため、研究開発室の2018(平成30)年度の事業として、6月27日から7月17日まで島根大学附属図書館本館(以下、本館とする)1階展示室で、西東文庫企画展示会を開催した。本稿でその概要を報告する。

表2 研究開発室によるこれまでの活動

<p>1. 資料に記載されているイラストのデジタル化</p> <p><u>2010（平成22）年</u></p> <p>10誌・159点（主に旅行記や日本の風俗に焦点を当てた書籍）</p>
<p>2. 展示会等の開催</p> <p><u>2008（平成20）年</u></p> <p>島根県立図書館で開催された、島根県立図書館、松江市立中央図書館と附属図書館による3館合同企画展示会「アメリカのラフカディオ」において、パネルによって資料を紹介した。</p> <p><u>2010（平成22）年</u></p> <p>出雲市立出雲中央図書館において、出雲市立図書館、島根県立大学出雲キャンパス図書館と医学図書館の3館合同で講演会「異国から見たニッポンー西東文庫をもとにー」を開催し、資料の一般公開を行った。</p> <p><u>2010（平成22）年・2014（平成26）年・2015（平成27）年</u></p> <p>イラストのデジタル画像をパネルにまとめ、医学図書館の展示ウォールで展示した。</p>
<p>3. 紹介冊子の発行</p> <p><u>2010（平成22）年10月</u></p> <p>「島根大学医学図書館所蔵「西東文庫」ー「西洋から見た日本研究」貴重コレクションー」を発行した。（監修/執筆：常松正雄（島根大学名誉教授）、執筆協力：岩田淳（島根大学医学部教授）、編集：医学図書館）</p> <p><u>2015（平成27）年3月</u></p> <p>「西東文庫ー西洋人の見た近世・近代の日本」（Japan and the Japanese Illustrated by Aimé Humbert c1874のパネル展示のパフレット）を発行した。</p>

2. テーマと展示方法

展示のテーマは、「イラストでたどる西洋人の見た明治初期の日本」とした。テーマ設定の理由は、次の2点である。(1) これまでデジタル化してきた西東文庫所収のイラストを有効活用したかったこと。(2) 西洋人の目で見た日本の近代黎明期の姿は、見る人の興味を引くのではないかと考えたこと。

展示方法は、資料の展示に加え、多彩なイラストが掲載されているイザベラ・バードの『Unbeaten tracks in Japan (日本奥地紀行)』(以下、『日本奥地紀行』とする)と、エミール・ギメの『Promenades Japonaises (日本散策)』(以下、『日本散策』とする)の一部をパネルで紹介した。

医学図書館には展示室がないことや資料内容から、松江キャンパスの本館展示室を会場とした。



図2 展示の様子

3. パネルで紹介した資料について

3.1 著者と著作について

パネルにした資料の著者とその内容を簡単に紹介する。

3.1.1 『日本奥地紀行』

イザベラ・バードは、1831年10月にイギリスのヨークシャで生まれた。1872年40歳の時に赴いたハワイ旅行がきっかけで、以来30年にわたり未開の地を求めて旅をし、旅行記を出版している。62歳のとき、女性としては初めて英国地理学会特別会員に選ばれている。

『日本奥地紀行』は、1878(明治11)年、バード(当時47歳)が初めて日

本を訪れた時、その様子を妹や知人に書簡で送り、後にそれをまとめて1880年に出版されたものである。『日本アジア協会誌』⁴⁾に掲載された論文の、「鬼怒川の流れに沿って進むコースは、まことに絵のように美しいが、困難な道である。外国人にもまた、日本人にもほとんど知られていない」という記述が日本への旅を決意させたと、バードは書いている。

時はまだ西南戦争が終わった翌年である。日本人ガイド伊藤鶴吉と二人で人力車と馬を使い、約3カ月に及ぶ旅であった。北海道へもわたり、アイヌ文化についても詳細に記録している『日本奥地紀行』はイギリスで評判になり、4版まで出版されている。

3.1.2 『日本散策』

著者のエミール・ギメは、1836年6月フランスのリヨンで生まれた。日本では仏像と東洋の宗教に関する書物の膨大なコレクションを集めている。現在、これらのコレクションが展示されているパリの国立ギメ東洋美術館⁵⁾はヨーロッパ最大のアジア芸術美術館となっている。また、ギメは東洋文化の普及に力を注ぎ、1879年には東洋語学校を設立し、日本からも留学生を受け入れている。

イラストを担当したフェリックス・レガメーは、1844年8月にパリで生まれた。『北斎漫画』などとの出会いにより日本文化に強い関心を抱いていた。1876年のフィラデルフィア万国博覧会でギメと出会い、記録画家として日本を訪れることになった。

『日本散策』は、1876（明治9）年、ギメがレガメーと共に訪れた日本各地の自然、風俗、寺社などについて記した紀行文で、1878年に出版された。彼らは、8月末に横浜に到着、東京、鎌倉、日光などへ出かけ、その後伊勢と京都に向かい、11月初めに出国し中国・インドを経て帰国している。

本書は日本散策シリーズの初編で、横浜、鎌倉、江ノ島の紀行文が収められている。なお、1880年刊行の第2巻⁶⁾は東京と日光を取り上げている。

3.2 文献調査

パネル作成にあたっては、高梨健吉訳『日本奥地紀行（平凡社（東洋文庫）：1973年）』と、時岡敬子訳『イザベラ・バードの日本紀行（講談社：2008年）』

を使用した⁷⁾。翻訳文の長さや読みやすさから、パネル本文への引用やイラストのキャプションには主に高梨訳を、一部時岡訳を採用することにした。『日本散策』の翻訳書は本館にも医学図書館にも所蔵がなかったため、新たに購入した。邦題は『1876ボンジュールかながわ；フランス人の見た明治初期の神奈川（青木啓輔訳、有隣堂；1977年）』である。

バードに関する文献⁸⁾は多い。彼女の成し遂げた旅に惹かれる人が多いからだろう。彼女の目的地は、当時の外国人の間で知られていたいわゆる観光地ではなかった。東北から北海道と近代化から取り残された地域を旅し、そこで見聞きしたり調査したりした事柄をありのままに、そして緻密に記録している。

一方で、ギメの『日本散策』には、文明開化の影響をいち早く受けた東京、神奈川の「新しい日本」の様子が描かれている。日本に到着してからわずか3日目に出かけた、鎌倉への1泊2日の旅の記録であるが、ギメの洒脱な文章と、レガメーのイラストからは二人の高揚した気持ちが伝わってくる。

『日本奥地紀行』や『日本散策』には、現代においても外国人から賞賛されることの多い、「日本は非常に安全で安心な国であること」、「人々が勤勉で礼儀正しいこと」が随所に書かれている。反対に、今ではほとんど見られなくなった「入れ墨」、「着物がはだけほとんど裸に近い恰好」、「裸の子ども」、「子どもをおんぶする習慣」などが、特筆すべきこととして記録されている。また、革命ともいえるような明治維新を庶民がしなやかに受け止め、それまでと変わらない生活を営んでいたこともわかり、庶民の歴史への興味をそそる。

4. 展示内容

4.1 パネル

パネルは、滞在地ごとに解説すると膨大な量になるため、著者の日本に対する印象を本文から引用することで、日本の姿を読み取ってもらえるようにした。また、社会制度等の解説はコラムとして挿入することにした。イラストの多くは既にデジタル化していたが、画質の良くないものは、医学部の総合科学研究支援センターのスキヤナを借用し、新たにデジタル化した。

パネルの構成及び内容は以下のとおりである。太字はパネルの見出しである。

(1) 西東文庫とは…

西東文庫の概要

(2-1) イラストでたどる西洋人の見た明治初期の日本

パネルで取り上げる図書の概要

(2-2) 西洋人の日本への興味

解説とコラム

[コラム1] お雇い外国人

[コラム2] 主なお雇い外国人

[コラム3] ジャポニズム

(3)~(4) 『Unbeaten tracks in Japan』 (日本奥地紀行)

①イザベラ・バードについて

②旅行地と出版された書籍⁹⁾

③バードの旅 ルートと携帯品などの解説とコラム

[コラム4] プラントン氏日本大地図・サトウ氏の英和辞典

④バードがみた日本

安全で美しい日本、子供への情愛、奥地の人々の生活、蝦夷でのアイヌの人々の印象について

(5)~(9) バードの見た風景 (図3-1参照)

各地の景色や風俗のイラスト (22点) とコラム

・富士山・日光東照宮

・奥地の風景：新潟の街路と運河、越後地方の流れ灌頂、秋田黒石の農家

・運輸：人力車、車夫、大八車、馬子、飛脚

・金谷邸 (日光の宿屋)

・庶民の生活：横浜の屋台、粕壁の茶屋、子どもをおんぶする女性、茶屋の中居、夏と冬の格好、蓑を着たバード

・蝦夷：アイヌの人々や家、倉など

[コラム5] 宿制度と陸運会社

(10)~(11) 『Promenades japonaises』 (日本散策)

①エミール・ギメについて (イラスト1点)

②フェリックス・レガメーについて

③ギメとレガメーがみた日本 (イラスト3点)

④旅程

(12)~(15) ギメが記録し、レガメーが描いた風景 (22点) (図3-2参照)

・運輸：人力車、車夫、サンパン、馬子

・湘南の宿：宿屋の女中、足を洗ってもらうギメ、女中に起こされるレガメー

・高い：湘南の茶屋、江ノ島で貝細工の絵を作っている女性、江ノ島の茶店

・庶民の生活：裸で行水、髪を結う、子どもをおんぶする女性と子ども、芝居小屋、お辞儀、横浜の港座 (歌舞伎)、釣りをする人、江ノ島の望遠鏡

4.2 展示図書

展示図書は、できるだけ幅広い分野からイラストや写真が豊富な図書を選定した。選定には、2010（平成22）年に発行した「西東文庫」の紹介冊子¹⁰にまとめられているコレクションの紹介や、医学図書館職員によって作成されていたイラストや写真についての解説が役立ち、文学作品や辞書、旅行案内も含め71冊を選定し展示することができた。特に紹介したい主要図書24冊には、図書の内容と著者に関する事項をまとめたキャプションを作成し、図書に併せて展示した。また、チェンバレンの旅行案内には、山陰道の項目があり本文を拡大コピーして紹介した（図4）。

初日に来場された、本学エスチュアリー研究センターの齋藤文紀先生から、『Narrative of the expedition of an American squadron to the China seas and Japans』のvol.2を所蔵しているとの連絡をいただいた。西東文庫にはvo.1しか所蔵していない図書であったので、ご厚意により借り受けて追加展示させていただくことになった（図5）。

展示資料は全てオリジナルで古いため、表紙がはずれたり、とじが緩くなったりしているものも多く、その取扱いには注意を払う必要があった。手に取って見てもらえるようにしたかったが、展示室に職員が常駐できないため、展示ケースの中にイラスト部分が見えるように見開きで展示した。

展示資料は別表のとおりである。原書の翻訳図書がある場合には邦題を記

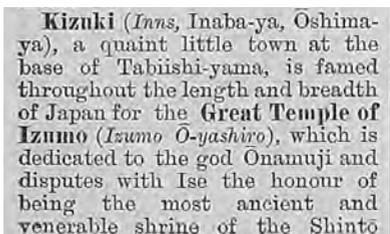


図4 『A handbook for travellers in Japan. 3rd.ed./Chamberlain B. H.1891』より
「杵築」部分を拡大したもの。出雲大社の記述がある。



図5 『Narrative of the expedition of an American squadron to the China seas and Japan』左が西東文庫のvol.1。右が齋藤先生からお借りしたvol.2。日米和親条約のアメリカ側の写しが収蔵されている。

載し、図書館に所蔵しているかどうかがわかるようにした。原書タイトルの和訳は附属図書館研究開発室で「西東文庫」をご担当いただいている、医学部の岩田淳教授にアドバイスをいただいた。

また、展示資料への理解を深めてもらうため、翻訳図書や関連図書67冊を展示室前に展示し、貸出ができるようにした。期間中の貸出冊数は9冊であった。

5. アンケートより

入場者数は、市民や教職員、学生など600人であった。来場者数は、展示室入口に設置した簡易アクセスカウンターで取得した。

また来場者にはアンケートを実施し28名から回答を得た。結果は、図6～図9のとおりである。

回答者は、教職員・学生と学外者の割合はほぼ半々であった。50代以上はほとんどが学外者であった。展示会を知るきっかけになったのは、学内者は、ほぼ学内の掲示であったが、学外者はテレビ・ラジオ・新聞の報道で知った人が多かった。展示内容の満足度は、「大変良かった」と「良かった」をあわせて100%であった。

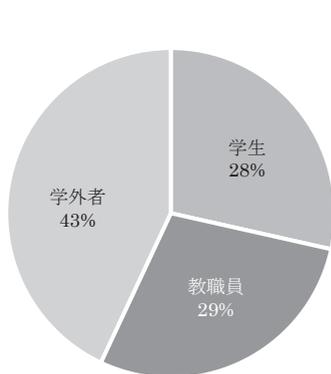


図6 回答者の区分

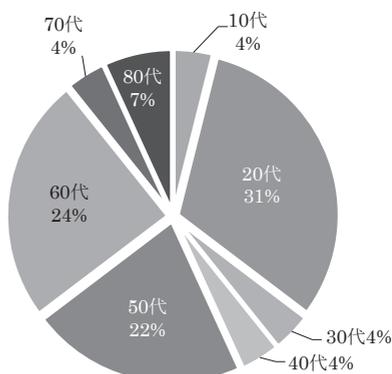


図7 回答者の年代

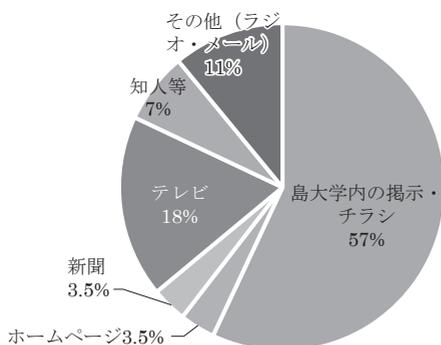


図8 展示会を知るきっかけ

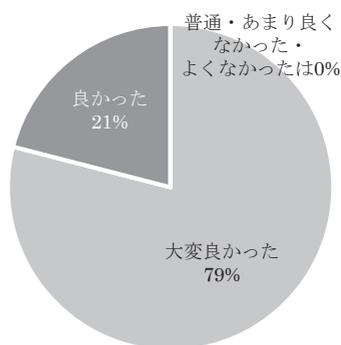


図9 展示内容の満足度

以下、アンケートの自由記述から、“印象に残った展示”と“展示会への意見・感想”を抜粋して記す。

印象に残った展示

イザベラ・バードに関するパネル展示が印象に残ったとの回答が非常に多かった。他に、チェンバレンの旅行ガイドに関心を寄せた人も多かった。

- ・イザベラ・バードの紹介。名前しか知らなかったが、アイヌとの交流もあったと知り、知的好奇心の大きさに感心した。
- ・イザベラ・バードのパネル展示。スケッチが印象的であった。
- ・バードを目的にしてきて、展示に満足した。チェンバレンとハーンの間を知っていたが、前者が山陰について記述していたのは知らなかった。
- ・チェンバレンの明治旅行案内記。山陰や中国地方の紹介文に興味深く読みました。
- ・外国から見た日本の風景、日本人の様子を描いたイラスト

展示会への意見・感想

理解しやすかった、興味深かったとの感想を多く寄せていただいた。これをきっかけに関連文献を読みたくなった、バードの旅をたどってみたいとなったとの感想を寄せた人もいた。展示内容から当時の日本の様子を伝えることができたのではないと思う。また、西東文庫資料の存在を知らなかつ

た方からは驚きの声と、今後の活用についてのご意見をいただいた。なお、展示会場に椅子を、というご意見が寄せられたのちは、本館職員により休憩用の椅子が置かれた。

- ・総合的に収集した資料がよく整理された展示となっていて理解しやすかった。
- ・良かったです。展示場に椅子が一つでもあれば。老体には休憩が必要。
- ・サトウ、イザベラ・バード、タウンゼント・ハリスの本を原書で読んだことがあり、大変興味深い展示でした。
- ・展示がとても興味深かったので、訳本等の関連文献も読んでみたくなりました。
- ・展示された本にあるルートで旅行してみたいと思いました。
- ・外から見た日本がどのように見えていたのか視覚的に分かった。
- ・昔の日本人がとても大らかで平和な暮しをしていたことに驚かされた。
- ・西洋人から見た昔の日本の様子がよくわかり、興味深く見ることができました。
- ・「日本の外側から見た日本」が書き留められた図書がこんなにも多く、細部にわたって描かれているのが面白かったです。教育分野について自分でも調べてみようと思いました。
- ・恥ずかしながら、西東文庫の存在を初めて知りました。素晴らしいコレクションなので、ハーン研究会などでもっと調査、活用していただけたらと思います。
- ・今回、西東文庫を初めて知りました。このような貴重な資料をこれからも公開していただけると喜びます。

6. おわりに

今回の展示会は、医学図書館とその資料をアピールするよい機会になった。しかし、展示できたのは全資料827冊の内のごく一部でしかない。「西東文庫」の全容を紹介する展示会を開催することも重要だが、今回のように分野ごとに小分けして資料を紹介するような企画も意義があると考え。引き続き検討していきたい。また、書庫見学や、図書館広報誌での資料紹介などによって「西東文庫」の周知に努める必要もある。併せて、劣化の進んだ資料の修繕を進めることも課題である。

今回の展示会を契機に、「西東文庫」が研究の対象や教材として活用されることを期待している。

注

- 1) 旧文部省が1978(昭和53)年から、文部科学省となった翌年の2002(平成14)年まで、学内・外の研究者の共同利用の便に供するために、外国図書、人文社会系特別図書、自然科学系図書購入のために行った予算措置である。医学図書館には、西東文庫のほかに、厚生省人口動態統計、解剖学教育ビデオ集成176巻がある。
- 2) 1819年に刊行されたドイツの詩人ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ70才の時の代表的詩集である。東洋オリエントに憧れ、人間の自然としての姿、文明に汚れていない世界に思いを馳せて書かれた。
- 3) 専門的な見地から図書館に関する事項について研究開発、助言を行う目的で2006(平成18)年に設置された。2017(平成29)年度~2018(平成30)年度は、2名の顧問、7名の併任室員を委嘱している。
- 4) 1872(明治5)年に創立された日本最古で国際的にも著名な日本・アジア研究の学術団体である。
- 5) ギメが1879年にリヨンで開館。1889年にパリに移設して正式にギメ美術館が誕生した。1945年にルーブル美術館の東洋部のコレクションがギメ美術館に移され、アジア以外で最大の東洋美術コレクションを誇る。
- 6) 第2巻の翻訳図書は本館に所蔵している。
・エミール・ギメ/フェリックス・レガメー著『ギメ東京日光散策/レガメ日本素描紀行』。雄松堂出版。1983年
- 7) 翻訳図書には、1880年に出版された初版本と、1885年に半分以上が削除され出版された普及版がある。初版本は、①時岡敬子訳のほかに、②金坂清則訳注『完訳日本奥地紀行 1-4』。平凡社。2012年-2013年がある。普及版には、③高梨健吉訳のほか、④金坂清則訳『新訳日本奥地紀行』。平凡社。2013年、⑤楠家重敏他訳『バード日本紀行』。雄松堂出版。2002年、⑥高畑美代子訳『イザベラ・バード「日本の未踏路」完全補遺』。中央公論事業出版。2008年がある。⑥以外は本館又は医学図書館に所蔵している。
- 8) 図書は本館又は医学図書館に所蔵している。
①宮本常一『イザベラ・バードの旅:「日本奥地紀行」を読む』。講談社。2014年、
②伊藤孝博『イザベラ・バード紀行:「日本奥地紀行」の謎を読む』。無朋舎出版。2010年、
③赤坂憲雄『イザベラ・バードの東北紀行:「日本奥地紀行」を歩く〈会津・置賜篇〉』。平凡社。2014年、
④パット・バー『イザベラ・バードー旅に生きた英国婦人』。講談社。2013年、
⑤加納孝代。イザベラ・バード『日本奥地紀行』—19世紀最大の女性旅行家イザベラ・バード。国文学解釈と鑑賞。1995。60(3)。

pp114-123、⑥小野崎晶裕. イザベラ・バード試論—パット・バー著『ある女性の奇妙な人生』に寄せて. 作新学院大学女子短期大学部紀要. 2006. 29. pp76-49、⑦置賜文化フォーラム (<http://okibun.jp/bird/>、アクセス2018年10月31日)

9) 1875年～1899年に8冊出版されている。

- ①The Hawaiian archipelago (イザベラ・バードのハワイ紀行). 1875年
- ②A lady's life in the Rocky Mountains (ロッキー山脈踏破行). 1879年
- ③Unbeaten tracks in Japan (日本奥地紀行). 1880年
- ④The golden Chersonese and the way thither (マレー半島の旅). 1883年
- ⑤Among the Tibetans (チベットの人々の中で). 1894年
- ⑥Journeys in Persia and Kurdistan, including a summer in the Upper Karun region and a visit to the Nestorian rayahs (ペルシアとクルジスタンの旅). 1891年
- ⑦Korea and her neighbours (朝鮮奥地紀行). 1898年
- ⑧The Yangtze Valley and beyond (中国奥地紀行). 1899年

10) 表2の3を参照

別表 西東文庫企画展示会 展示図書リスト

No	編著者名	書名	翻訳図書名 (*は本館**は医学図書館に所蔵) 翻訳図書が出版されていないものは、[] に邦訳を記した
1	—	The illustrated London news : January to June 1853. (vol.22) London: William little. 1853.	*描かれた幕末明治: イラストレイテッド・ロンドン・ニュース (雄松堂書店)
2	Satow Ernest Mason	The Silesian Loan and Frederick the Great. Oxford: Clarendon. 1915	[シレジアの借款とフリードリヒ大王]
3	Bird Isabella L.	Unbeaten tracks in Japan : an account of travels on horseback in the interior, including visit to the aborigines of Yezo and the shrines of Nikko and Ise. vol. 1 London: John Murray. 1880	*日本奥地紀行 (平凡社)
4	Bird Isabella L.	Unbeaten tracks in Japan : an account of travels on horseback in the interior, including visit to the aborigines of Yezo and the shrines of Nikko and Ise. vol. 2 London: John Murray. 1880	
5	Bousquet Georges	Le Japon de nos jours et les échelles de l'Extrême Orient: ouvrage contenant trois cartes. vol.1 Paris: Hachette, 1877	*日本見聞記: フランス人の見た明治初年の日本 (みすず書房)
6	Bousquet Georges	Le Japon de nos jours et les échelles de l'Extrême Orient: ouvrage contenant trois cartes. vol.2 Paris: Hachette, 1877	
7	Eden Charles H.	Japan : historical and descriptive : revised and enlarged from "Les voyages célèbres". London: Marcus Ward. 1877	[日本: その歴史と現在]
8	Griffis William Elliot	The Mikado's Empire. York: Harper & Bros. 1876	*ミカド: 日本の内なる力 (岩波書店)

No	編著者名	書名	翻訳図書名（*は本館**は医学図書館に所蔵）翻訳図書が出版されていないものは、[] に邦訳を記した
9	文部省	History of the Empire of Japan / compiled and translated for the Imperial Japanese Commission of the World's Columbian Exposition, Chicago, U.S.A., 1893. Tokyo: Dai Nippon Tosho. 明治26 [1893]	[日本帝国の歴史]
10	Holland Clive, Smyth Montagu	Old and new Japan. London: J.M. Dent. 1907	[日本今昔]
11	Howard Alexander, Newman Ernest	The menacing rise of Japan : ninety years of crafty statesmanship in pictures. London: G.G. Harrap. 1943	[日本の脅威：90年にわたる巧妙な政治手腕]
12	Howard Ethel	Japanese memories. London: Hutchinson. 1918	*英国家庭教師夫人の回想：明治日本見聞録（講談社）
13	Knox George William	Imperial Japan : the country & its people. London: G. Newnes. 1905	[日本帝国－国と人々]
14	Laurie André, Régamey Félix	Autour d'un lycée Japonais. Nouvelle Edition. Paris: Hetzel. [18-]	[日本のリセを巡って]
15	Menpes Mortimer, Menpes Dorothy	Japan : a record in colour. London: A. & C. Black. 1901	[日本絵画紀行]
16	宮川 益治	Life of Japan. New York: Baker & Taylor. c1907	[日本の生活]
17	Moore Herbert	A Japanese family : a tale. Nantwich: A.E. Hill. 1903, 1905	[ある日本人の家族：ある物語]
18	Norman Henry	The real Japan : studies of contemporary Japanese manners, morals, administration, and politics. New York: Charles Scribner's Sons. 1908	[ほんとうの日本：現代日本のマナー、行政と政治に関する研究]
19	小川 一眞, Murdoch James	Sights and scenes on the Tokaido. M.A. Tokyo: [s.n.], 1893	[東海道名所案内]
20	Ponting Herbert G.	In lotus-land Japan. London: Macmillan. 1910	英国人写真家の見た明治日本－この世の楽園・日本（講談社）
21	Ponting Herbert G., 小川 一眞	Japanese studies. Yokohama: Kelly Walsh. c1906	[日本の研究]
22	Reed Edward J.	Japan : its history, traditions, and religions with the narrative of a visit in 1879. 2nd ed. vol.1 London: J. Murray. 1880	[日本：その歴史・伝統・宗教]
23	Reed Edward J.	Japan : its history, traditions, and religions with the narrative of a visit in 1879. 2nd ed. vol.2 London: J. Murray. 1880	
24	Satow Ernest Mason	A diplomat in Japan : the inner history of the critical years in the evolution of Japan when the ports were opened and the monarchy restored, recorded by a diplomatist who took an active part in the events of the time, with an account of his personal experiences during that period. London: Seeley, Service. 1921	*一外交官の見た明治維新（岩波書店）

No	編著者名	書名	翻訳図書名 (*は本館**は医学図書館に所蔵) 翻訳図書が出版されていないものは、[] に邦訳を記した
25	Scidmore Eliza Ruhamah	Jinrikisha days in Japan. New York: Harper & Brothers . 1900	日本・人力車旅情 (有隣社)
26	Sladen Douglas, Lorimer Norma	The peace edition of More queer things about Japan : to which are added a précis of the terms of peace, and a skeleton history of the entire war, specially compiled for this edition, entitled "The War at a glance". London: Anthony Treherne. 1905	[風変わりな日本 : 「平和」編]
27	Statler Oliver	The black ship scroll : an account of the Perry expedition at Shimoda in 1954 and the lively beginnings of people-to-people relations between Japan & Americ. Weathermark ed. Tokyo: John Weatherhill. 1964	[黒船絵巻]
28	Steger Friedrich, Hintze Eduard, Wagner Hermann	Das alte und das neue Japan, oder die Nippon-Fahrer : in Schilderungen der bekanntesten alteren und neueren Reisen. 3., bis auf die Gegenwart ergänzte Ausg. Leipzig: Verlag von Otto Spamer. 1874	[日本今昔]
29	Taylor Bayard, Griffis William Elliot	Japan in our day. New York: Charles Scribner's Sons. 1893, c1892 (Illustrated library of travel.)	[現代の日本]
30	Tristram H.B., Whympe Edward	Rambles in Japan : the land of the rising sun. London: Religious Tract Society. 1895	[日本そぞろ歩き - 日の登る国]
31	Worswick Clark	Japan, photographs, 1854-1905. London: H. Hamilton. 1980	[写真で見る日本]
32	Chamberlain Basil Hall, Mason W.B.	A handbook for travellers in Japan. 3rd ed. London: J. Murray. 1891	*チェンバレンの明治旅行案内 (日本見聞記シリーズ) (新人物往来社)
33	Griffis William Elliot	Townsend Harris, first American envoy in Japan. Boston: Houghton, Mifflin. 1895	[初の日本大使 : タウンゼント・ハリス]
34	Harris Townsend, Cosenza Mario Emilio	The complete journal of Townsend Harris : first American consul and minister to Japan. Rev. ed. Rutland, Vt.: Tokyo: C.E. Tuttle. 1959	*日本滞在記 (岩波書店)
35	Hawks Francis L. Perry Matthew Calbraith	Narrative of the expedition of an American squadron to the China seas and Japan : performed in the years 1852, 1853, and 1854, under the command of Commodore M.C. Perry, United States Navy, by order of the Government of the United States Washington: Published by order of the Congress of the United States, Beverley Tucker, Senate Printer. 1856	*日本遠征記 (岩波書店)
36	Perry, Matthew Calbraith, Pineau Roger	The Japan Expedition, 1852-1854 : the personal journal of Commodore Matthew C. Perry. City of Washington: Smithsonian Institution Press. c1968 (Smithsonian Institution publication.4743)	*ペリー日本遠征日記 (雄松堂出版)
37	Taylor Bayard	A visit to India, China, and Japan, in the year 1853. New York: G.P. Putnam. 1855	[インド・中国・日本旅行記]

No	編著者名	書名	翻訳図書名 (*は本館**は医学図書館に所蔵) 翻訳図書が出版されていないものは、[] に邦訳を記した
38	Alcock Rutherford	The capital of the Tycoon : a narrative of a three years' residence in Japan. vol. 1 London : Longman, Green, Longman, Roberts, & Green, 1863	*大君の都 : 幕末日本滞在記 (岩波書店)
39	Alcock Rutherford	The capital of the Tycoon : a narrative of a three years' residence in Japan. vol. 2 London : Longman, Green, Longman, Roberts, & Green, 1863	
40	Chamberlain Basil Hall	Things Japanese : being notes on various subjects connected with Japan for the use of travellers and others. 2nd ed., rev. and enl. London: K. Paul, Trench, Trubner. 1891	*日本事物誌 (平凡社)
41	Guimet Emile, Régamey Félix	Promenades japonaises. Paris: G. Charpentier editeur. 1878	**1876ボンジュールかながわ (有隣社)
42	Hartshorne Anna C.	Japan and her people. vol. 1 Philadelphia: John C. Winston. c1902	[日本とその住民]
43	Hartshorne Anna C.	Japan and her people. vol. 2 Philadelphia: John C. Winston. c1902	
44	Finck Henry T.	Lotos-time in Japan. New York: C. Scribner's Sons. 1895	[日本での至福の時]
45	Humbert Aimé, Hoey Cashel, Bates Henry Walter	Japan and the Japanese : illustrated. London: Richard Bentley, 1874	絵で見る幕末日本 (講談社)
46	城谷 黙	Mock Joya's Things Japanese. 5th revised ed. Tokyo: Tokyo News Service. 1964	[モック・ジョーヤの日本考]
47	Knollys Henry	Sketches of life in Japan. London: Chapman. 1887	[日本での生活のスケッチ]
48	Batchelor John	The Ainu of Japan : the religion, superstitions, and general history of the hairy aborigines of Japan. London: Religious Tract Society. 1892	[日本のアイヌ族]
49	Ayrton M. Chaplin, Griffis William Elliot	Child-life in Japan, and Japanese child stories. Boston: D.C. Heath. c1901	[日本の子どもの暮らしと、日本の子どもの物語]
50	Mitford, Baron	Tales of old Japan. 2nd and cheaper ed. London: Macmillan. 1874	*日本おとぎ話集 (大阪教育図書)
51	Benedict Ruth	The chrysanthemum and the sword : patterns of Japanese culture. Boston: Houghton Mifflin. c1946	*菊と刀 : 日本文化の型 (社会思想社)
52	Morse Edward S.	Japanese homes and their surroundings. London: Sampson Low, Marston, Searle, and Rivington. 1886	*日本人の住まい (八坂書房)
53	Alcock Rutherford	Art and art industries in Japan. London: Virtue. 1878	[日本の芸術と芸術産業]
54	Régamey Félix	Japan in art and industry : with a glance at Japanese manners and customs. New York: G.P. Putnam's Sons. 1893	[日本の芸術産業]

No	編著者名	書名	翻訳図書名 (*は本館**は医学図書館に所蔵) 翻訳図書が出版されていないものは、[] に邦訳を記した
55	Conder Josiah	The flowers of Japan and the art of floral arrangement. Tokyo: Hakubunsha. 1891	[日本の花と生け花]
56	Sadler A.L.	The art of Flower arrangement in Japan : a sketch of its history and development. New York: Dutton. 1933	[日本の生け花]
57	Chamberlain Basil Hall	A handbook of colloquial Japanese. 4th. ed., rev. London: C. Lockwood. 1907	日本口語文典 (おうふう)
58	Hepburn James Curtis	A Japanese-English and English-Japanese dictionary : abridged by the author. 2nd ed. rev. and enl. Tokyo: Maruya. 1887	[和英語林集成 : 縮約再版]
59	Hepburn James Curtis	A Japanese and English dictionary, with an English and Japanese index. London: Trubner. 1867	*和英語林集成 (港の人)
60	Satoh Henry	Anglo-Japanese conversation lessons. 26th ed. Tokyo: H. Hayashi. 1899	[日英会話レッスン]
61	Aston William George	A history of Japanese literature. London: William Heinemann. 1899 (Short histories of the literatures of the world.6)	*日本文学史 (金港堂)
62	Fenollosa Mary McNeil	Blossoms from a Japanese garden : a book of child-verses. London: William Heineman. 1913	[日本庭園の花 : 子供の詩]
63	Ballard Susan	Fairy tales from far Japan : translated from the Japanese. London: Religious Tract Society. [1898]	[日本のおとぎ話]
64	Ozaki Yei Theodora	The Japanese fairy book. Westminster: Archibald Constable. 1903	[日本のおとぎ話]
65	Watanna Onoto, Sano Kiyokichi	Daughters of Nijo : a romance of Japan. New York: Macmillan. 1904	[二条の姫君]
66	Watanna Onoto, Yeto Genjiro	A Japanese nightingale. New York: Harper & Brothers Publishers. 1901	[日本鶯]
67	Watanna Onoto, Sano Kiyokichi	The heart of hyacinth. New York: Harper & Brothers. 1904	[お蘭の心]
68	Hearn Lafcadio	Kwaidan : stories and studies of strange things. Copyright ed. Leipzig: Bernhard Tauchnitz. 1907 (Collection of British authors.v. 3987)	*怪談 (国書刊行会ほか)
69	Loti Pierre	Madame Chrysantheme. Paris: Calmann-Levy. [19-]	*お菊さん (岩波書店)
70	Loti Pierre, Plimsoll S. R. C., Menpes Mortimer	Madame prune. London: T. Werner Laurie. 1919	[お梅さん]
71	Loti Pierre	La troisieme jeunesse de Madame prune. Paris: Calmann-Levy. 19-	お梅が三度目の春 (白水社)

大学図書館におけるAR(拡張現実)を使用した展示の試み

— 「AR和歌展」実施報告—

島根大学企画部図書情報課情報サービスグループ 三村 のぞみ

1. はじめに

島根大学附属図書館本館では、2018（平成30）年10月20日から11月11日まで、附属図書館展示室において「AR和歌展」を開催した。AR（Augmented Reality）は拡張現実ともいい、『広辞苑』第7版の定義によると次のようなものである。

「人が知覚する環境の情報に、別の情報を付加するなどして現実認識を拡張する技術。また、その拡張された認識。ヘッドマウントディスプレイを使って、現在見ている景色にその場所に関連する情報を表示する類。」¹⁾

「AR和歌展」では、このARと和歌を組み合わせて展示を行った。

本稿は5章で構成されており、特に第2章と第3章に重点を置いた。第2章では、展示の概要を示すとともに、なぜARを用いた展示を企画したかということを説明した。第3章では、主にARコンテンツの作成方法を説明しているのので、特に同様の展示を企画している方に参考にしていただきたい。

2. 「AR和歌展」のねらい

2.1 展示の概要

展示は、展示室の四方壁面側に解説パネルを掲示し、中央奥に関連資料を展示したケースを、部屋中央にはARコンテンツを表示するためのマーカーとタブレット端末を並べた机を配置する構成とした（図1）。展示パネルは、和歌をあまり知らない留学生などにも楽しんでもらえるよう、和歌の概要のほか、江戸時代の出雲地方の歌壇などについて、日本語と英語の2か国語で

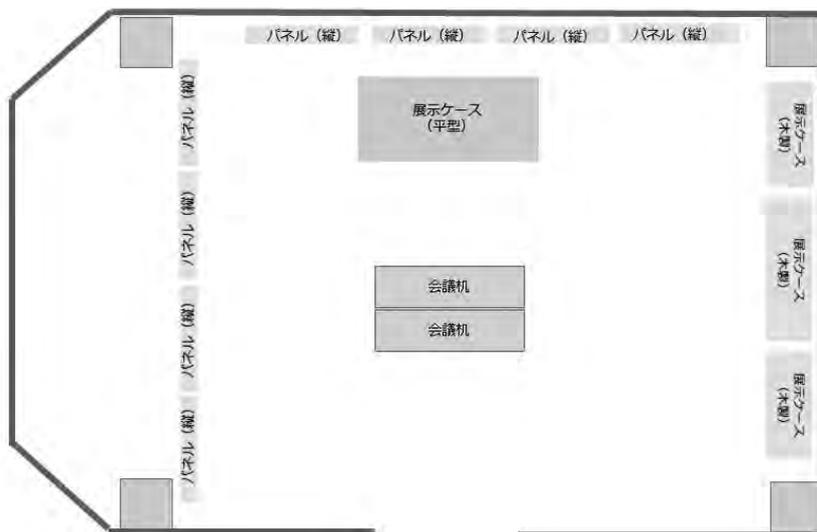


図1 「AR和歌展」の展示室レイアウト

解説した。展示ケースには、ARコンテンツ作成に使用した当館所蔵の歌集や関連する所蔵図書を展示した。

次に、ARを使ったコンテンツの概要を図2に示す。ARコンテンツの内容は、ドライフラワーを使った現実世界のマーカーにスマートフォンやタブレットをかざすと、その花を詠んだ和歌が画面上に表示されるというものである。花は菊、桔梗、撫子、葛、薄、女郎花、萩の7種とし、花1種に和歌1首が対応するよう、『古今和歌集』と『類題八雲集』²⁾からあわせて7首を選定した。ARコンテンツに使用した和歌テキストは、『古今和歌集』の和歌については金子元臣著『校註古今和歌集』³⁾から引用し、『類題八雲集』の和歌については当館デジタル・アーカイブで公開されている画像⁴⁾をもとに筆者が翻刻した。なお、翻刻にあたっては芦田耕一、原豊二、山崎真克編著『類題八雲集：翻刻・解説と作者索引』⁵⁾を参考とした。実際にタブレット上にARコンテンツが表示されている様子を、図3に示す。

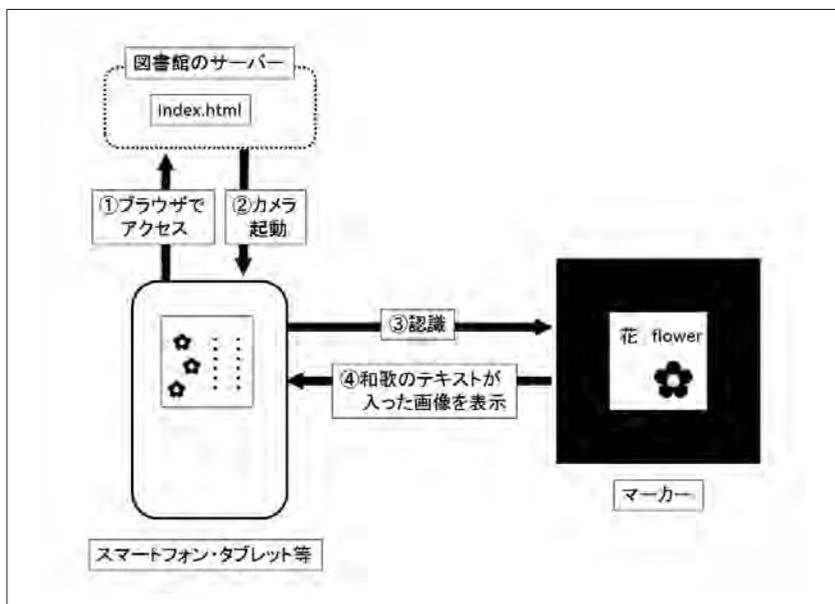


図2 ARコンテンツ図解



図3 タブレット上に表示されたARコンテンツ

2.2 ARを導入した理由

ARは比較的新しい技術である。2016年にリリースされたスマートフォン向けゲームアプリ「Pokémon Go」⁶⁾でARというのを知った人もいないだろうか。筆者は様々なメディアでARやVR（仮想現実）について見聞きするにつれ、それらに対して興味が生まれた。興味のままARやVRについて調べていくうちに、この新しい技術と古典資料という異質なものを掛け合わせれば面白い展示になるのではないかというアイデアが生まれた。中でも現実世界に画像などを重ねて表示できるARを活用すれば資料の新しい見せ方を提示できるのではないかと思い、ARを図書館資料の展示に使うことにした。

ただし、古い資料の展示にARを使うというアイデアは「AR和歌展」が初というわけではなく、2012年には江戸期古銭の展示にARを活用した実験⁷⁾について、2015年にはARを用いて現実世界とリンクさせた博物館展示⁸⁾について報告されており、他にも国内外の博物館等でARを活用した展示が行われている。

2.3 ARと和歌を組み合わせた理由

当初より、スマートフォンやタブレット端末などの比較的小さな画面上にARコンテンツを表示させることを考えていたため、ARコンテンツはその画面内に収める必要があった。和歌であれば字数が少ないこと、和歌に関する資料を当館が所蔵していることから和歌をARコンテンツに用いることにした。

2.4 花を詠んだ和歌に着目した理由

花を詠んだ和歌に着目した理由は大きく分けて2つある。1つめは、和歌の題材となりうるもののうち、花が比較的調達しやすく、ドライフラワーに加工すれば管理も容易であること。2つめは、花にスマートフォン等をかざして和歌が画面上に表示されるという仕掛けにより、歌人が花から着想を得て作品を作り出したプロセスを追体験できるのではないかと思ったことである。

「AR和歌展」は和歌の専門家に向けたものではなく、和歌についてあま

り知らない人を主な対象として企画した。和歌について知るだけでなく、和歌を詠んだ人の気持ちを感じてほしいとの思いから上記のような仕掛けを用意することにした。

花は近隣の生花店で購入したほか、筆者の上司の自宅敷地内に生えていたものの提供を受けた。

3. ARコンテンツの作成

3.1 ARコンテンツの要件

「AR和歌展」のARコンテンツ作成における要件は次の2つである。

(1) ARコンテンツは、Webアプリケーション⁹⁾として提供されること。

もしARコンテンツが、それを閲覧しようとする者のスマートフォン等にアプリケーションのインストールを強いるものであれば、来場者にとっての心理的ハードルが高くなると思われた。そのため、スマートフォンへのインストールを必要としないWebアプリケーションとしてコンテンツを作成することにした。

(2) ARコンテンツの表示にあたっては、当館が準備したタブレット端末以外に、来場者自身が所持するスマートフォンやタブレットを使用できること。

「AR和歌展」においては、ARコンテンツ閲覧用にタブレット端末を一台用意していたが、複数の来場者がARコンテンツを閲覧しようとした場合に、タブレット端末の順番待ちが生じてしまい、来場者に不便さを感じさせてしまう恐れがあった。そのため、来場者自身が所持するスマートフォン等をARコンテンツの閲覧に利用できるようにした。

これら2つの要件を満たすARコンテンツを実現するため、Webアプリケーションと、現実世界に置くマーカーの作成を行った。

3.2 Webアプリケーションの作成

Webアプリケーションの作成は、HTMLページを構築する要領で行った。

3.2.1 ディレクトリ構成

「AR和歌展」のために作成したWebアプリケーションのディレクトリ構

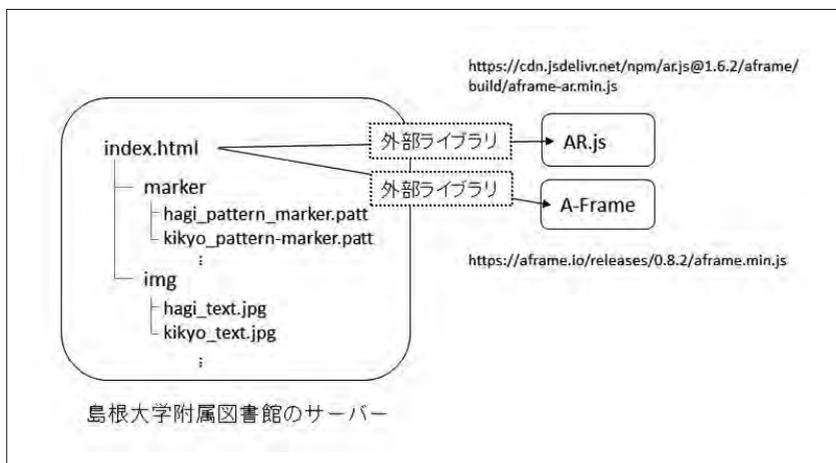


図4 「AR和歌展」webアプリケーションのディレクトリ構成

成は、図4の通りである。

ARコンテンツを閲覧するには、当館のサーバー上にアップロードしたindex.htmlにスマートフォン等のブラウザでアクセスする必要がある。index.htmlへは、マーカの付近にQRコードを用意しておき、これを読み取ることでアクセスできるようにした。

3.2.2 外部ライブラリの導入

「AR和歌展」のARコンテンツには、JavaScriptライブラリ¹⁰⁾のひとつであるAR.js¹¹⁾を使用した。AR.jsはJerome Etienne氏がGitHub¹²⁾上で公開しているオープンソースのライブラリである。ARコンテンツの作成において必要とされる複雑な処理を、AR.jsをHTMLファイルに読み込むことで代わりに行ってくれるというものである。

また、AR.jsのほかに、A-Frame¹³⁾を使用した。A-FrameはMozillaが提供するオープンソースのWebVRフレームワークであり、AR.jsと同様にGitHub上で公開されている¹⁴⁾。

3.2.3 サーバー側の対応

「AR和歌展」のARコンテンツを置くサーバーでは、下記2点のような対

応をした。この対応については、GET ARの記事¹⁵⁾から示唆を得た。

(1) https通信への対応

スマートフォン等のカメラへアクセスするため、https通信への対応は必須である。ARコンテンツを置くサーバーは既にhttps通信への対応をしていたため、「AR和歌展」に際しては特段必要な処理はなかった。

(2) CORS (Cross-Origin Resource Sharing) への対応

外部ドメインからライブラリを読み込むため、サーバーのヘッダに「Access-Control-Allow-Origin: *」を追加する必要がある。この対応はサーバー管理者に依頼した。

3.2.4 HTMLファイル (index.html) の内容

HTMLファイル (index.html) のソースコードについては、図5に抜粋を示す。

任意の画像をマーカーとして使用するにあたっては、AR.jsのIssuesに寄せられた質問“Custom pattern is not being recognized #164”に対するWaveF氏のコメント¹⁶⁾を参考にタグを記述した。また、マーカーのpattファイル作成については、Alexandra Etienne氏の記事¹⁷⁾を参考とした。

「AR和歌展」で使用したマーカーのpattファイルを含む作成手順は3.3の通りである。

```
<html>
<head>
  <meta name="viewport" content="width=device-width, initial-scale=1, user-
scalable=no">
  <!--ライブラリの読み込み-->
  <script src="https://aframe.io/releases/0.8.2/aframe.min.js"></script>
  <script src="https://cdn.jsdelivr.net/npm/ar.js@1.6.2/aframe/build/aframe-
ar.min.js"></script>
</head>

<body style="margin : 0px;">
  <!--シーンにAR.jsを埋め込む デバッグキャンバスを表示しない-->
  <a-scene embedded arjs="debugUIEnabled:false;">

    <!--任意のマーカーを使用 菊-->
    <a-marker preset="custom" type="pattern" url="marker/kiku_yellow_pattern-
marker.patt">
  <!--マーカーの上に画像を表示する 画像の場所、回転の角度、大きさ、位置-->
    <a-image src="img/kiku_yellow_text.jpg" rotation="270 180 180" scale="2 2 2"
position="0 0 0"></a-image>
  </a-marker>

    <!--任意のマーカーを使用 撫子-->
    <a-marker preset="custom" type="pattern" url="marker/nadeshiko_pattern-
marker.patt">
    <a-image src="img/nadeshiko_text.jpg" rotation="270 180 180" scale="2 2 2"
position="0 0 0"></a-image>
  </a-marker>

  <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block; margin: 10px 0;">省略</div>

  <a-entity camera></a-entity>
</a-scene>
</body>
</html>
```

図5 「AR和歌展」index.htmlのソースコード（抜粋）

3.3 マーカーの作成

- (1) プレゼンテーションソフトなどを用い、マーカーの枠と、枠内の余白に配置したテキストを印刷する。「AR和歌展」では、枠と枠内の余白の幅は、ほぼ1:2とし、A3サイズで印刷した。
- (2) (1) で印刷した枠内の余白に接着剤でドライフラワーを貼り、ドライフラワーの全体が映るように写真を撮る。このとき、影やテキストが映り込んでもよい。
- (3) 画像編集ソフトで(2)の影などを含む背景を削除し、余白をトリミングする。
- (4) (3)の画像を、(2)と位置が同じになるようにプレゼンテーションソフト上のスライドに配置する。
- (5) (4)の枠内の部分を切り抜いた画像を保存しておき、AR.js Marker Training¹⁸⁾へアップロードしてpattファイルを作成する。特段変更する必要性がなければ、Pattern Ratioは0.5のままにしておく。pattファイルをダウンロードして、任意のディレクトリに保存する。「AR和歌展」では「marker」というディレクトリを作成した(図4)。
- (6) (2)で作成した現実世界に置くマーカーは、不必要な部分を切ってコルクボードに貼り、スタンドを使用して自立するようにした。大きさは一辺30cm程度の正方形となった。

3.4 動作不良とその解消

ARコンテンツの作成後、次のような動作不良が起きた。

3.4.1 マーカーの類似性による認識ミス

「AR和歌展」のマーカーは黒枠、花の名前テキスト、ドライフラワーで構成されている。複数のマーカーを用いたため、マーカーをそれぞれ識別できるように、デザインをひとつひとつ異なるものにする必要があった。当初より花の名前テキストやドライフラワーの位置を少しずつ変えて全く同じデザインになるものが出ないようにしていたが、マーカーの読み違いが発生した。

マーカーAにスマートフォン等をかざした場合、対応する画像Aが表示されなければならないが、画像Bが表示されてしまった。画像BはマーカーB

と対応するものであり、マーカー B にスマートフォンをかざすと、画像 B が表示され、画像 A は表示されなかった。マーカー A とマーカー B は、ドライフラワーの色、形、位置は全く異なるものだったが、花の名前テキストの位置が同じであった。マーカー A の花の名前テキストの位置を変えたところ、対応する画像 A が表示されるようになった。

3.4.2 外部ライブラリのバージョンに起因する動作不良

当初 AR コンテンツを作成した際、参照していたバージョンは AR.js の 1.6.0 であった。その後 1.6.1、1.6.2 がリリースされたため、それに伴って index.html のライブラリ参照部分のバージョン番号に書き変えるべきだったが、1.6.0 のままになっていた。これにより AR コンテンツが動作しなくなった。そこでライブラリ参照部分を 1.6.2 に書き変えたところ、動作するようになった。

4. 展示期間中の来場者数とアンケート結果

4.1 展示期間中の来場者数

2018年10月20日から11月11日までの展示期間中に来場した人は475名であった。

4.2 アンケート結果と課題

展示会場にはアンケート用紙と回収箱を設置し、37名から回答を得た。アンケートに協力してくれた方のうち34名は島根大学の学生または教職員であった。未記入であった1名を除くアンケート回答者の年代は図6に示すとおりである。

展示内容の満足度については、図7に示すとおり未記入の1名を除き36名から「大変良かった」または「良かった」との回答を得た。自由回答でも「自分から参加できる展示は楽しいです。和歌に興味が湧きました。」といった感想や、「ARを利用する、というのが大変面白かったです。」といった感想が寄せられた。

その一方で「私のスマホではARがうまくうつりませんでした。」「ARはずっとできませんでした。残念。」というコメントもあった。図書館側で用意

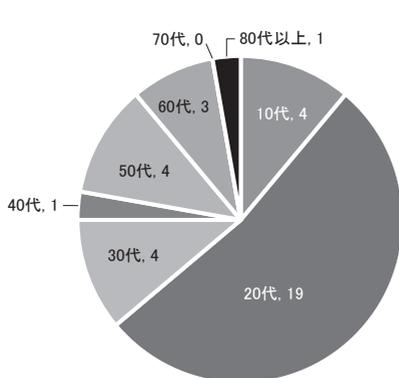


図6 「AR和歌展」アンケート回答者の年代

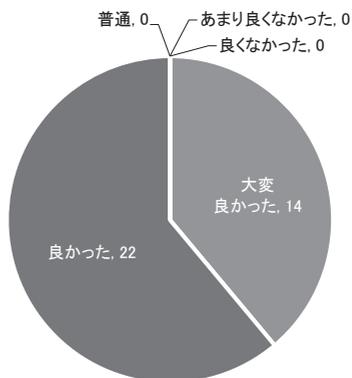


図7 「AR和歌展」アンケート展示内容の満足度

したタブレット端末以外の動作確認は、複数の職員の協力を得て、それぞれの職員が所持するスマートフォンで行った。これにより、Android7.1.1以降、iOS11以降のスマートフォンで動作することは確認できたが、すべての機種で確認を行ったわけではないので、機種の仕様によりARコンテンツを閲覧できなかった可能性がある。また、ARコンテンツのマーカ付近にARコンテンツを見るための手順書を作成し、置いていたが、その指示がわかりにくかったという可能性もある。今後は、指示の内容をさらに明確化するよう努めるとともに、目につきやすいところに、ARコンテンツの見方がわからない場合は気軽に職員に尋ねてほしい旨を掲示しておくなどの工夫をしたい。

5. おわりに

今回ARを使ったことで、これまで和歌や古典になじみのなかった人に、興味を持つきっかけを提供できたと感じた。テクノロジーの発展は日進月歩であり、図書館もこれについていけるよう、情報収集を怠らないようにしたい。

「AR和歌展」の展示解説の作成にあたっては、本学法文学部准教授の野本瑠美先生に監修をしていただいた。ご多忙にもかかわらず、快く協力して下さったことに厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 新村出編. 広辞苑. 第7版, 岩波書店, 2018, 3188p.
- 2) 1842年頃に成立した類題和歌集。千家尊孫の編纂といわれ、出雲地方の歌人の作品を集めたもの。
- 3) 金子元臣著. 校註古今和歌集. 明治書院, 1923, 207p.
- 4) 島根大学附属図書館. “類題八雲集”. 島根大学附属図書館デジタル・アーカイブ. <https://da.lib.shimane-u.ac.jp/content/1629>, (参照 2018-12-20)
- 5) 芦田耕一, 原豊二, 山崎真克. 類題八雲集: 翻刻・解説と作者索引. [島根大学], 2009, 186p, 横19p.
- 6) Niantic, Inc.; Pokémon; Nintendo/Creatures Inc.; GAME FREAK inc.. Pokémon Go. <https://www.pokemongo.jp/>, (参照 2018-12-20)
ARモードをオンにすると、現実世界の風景にモンスターが存在しているかのような写真を撮ることができるなど、様々な機能を利用できる。
- 7) 城石梨奈, 宮田公佳, 井上由佳. 歴史資料への理解・興味関心を高める展示手法: 江戸期古銭の展示にAR技術を適用した実験から. 博物館雑誌. 2012, 第37巻, 第2号(通巻56号), p.65-82.
- 8) 関口健太郎. AR技術を利用した現実世界とリンクする博物館展示. 慶應義塾大学, 2014, 101p. 修士論文. 入手先, 慶應義塾大学学術情報リポジトリ (KOARA), http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40002001-00002013-0035, (参照2018-12-20)
- 9) 「ブラウザ上で利用するアプリケーションの総称。ウェブアプリともいう。」
“ウェブアプリケーション”, 日本大百科全書 (ニッポニカ), JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照2018-12-20)
- 10) 「【IT関連用語】【コンピューター】コンピュータープログラムの集まり。複数のプログラムで汎用的に使える。特定の処理を示すひとかたまりの命令をファイル化したもの。」
“ライブラリー [カタカナ語]”, 情報・知識 imidas 2018, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照2018-12-21)
- 11) Jerome, Etienne. AR.js. Version 1.6.2, 2017. <https://github.com/jeromeetienne/AR.js>, (参照 2018-12-25)
作成者名と出版年は当該入手先のライセンス条文から引用した。
- 12) GitHub. <https://help.github.com/>, (参照2018-12-21)
- 13) Mozilla. A-FRAME. <https://aframe.io/>, (参照 2018-12-25)
- 14) A-Frame authors. A-Frame. Version 0.8.2, 2015-2017, <https://github.com/aframevr/aframe/>, (参照 2018-12-25)
作成者名と出版年は当該入手先のライセンス条文から引用した。

- 15) GET AR. “開発が容易に？ ARライブラリの「AR.js」を使用してCodePen上で動かしてみた”. GET AR: 世界を変えるARニュースメディア. 2017-4-13. <http://getar.jp/17068/>, (参照 2018-12-27)
- 16) WaveF. “Custom pattern is not being recognized #164”. GitHub-[jeromeetienne/AR.js](https://github.com/jeromeetienne/AR.js): Efficient Augmented Reality for the Web - 60fps on mobile!. 2017-9-26. <https://github.com/jeromeetienne/AR.js/issues/164#issuecomment-332065686>, (参照 2018-12-25)
- 17) Alexandra Etienne. “How To Create your Own Marker ?”. [AR.js Efficient Augmented Reality for the Web](https://medium.com/arjs/how-to-create-your-own-marker-44becbec1105). 2017-6-7. <https://medium.com/arjs/how-to-create-your-own-marker-44becbec1105>, (参照 2018-12-25)
- 18) AR.js Marker Training. <https://jeromeetienne.github.io/AR.js/three.js/examples/marker-training/examples/generator.html>, (参照 2018-12-25)

「戦争と平和を考える2018—永井隆と平和への思い—」 実施報告

島根大学企画部図書情報課情報サービスグループ 小林 奈緒子

1. はじめに

島根大学附属図書館本館では、企画展「戦争と平和を考える2018—永井隆と平和への思い—」を開催した(以下、本展)。当館では、戦争や平和について、資料の展示を通して理解を深め、自由な議論の場を提供することを目的として2014(平成26)年より毎年継続して企画展を開催してきた¹⁾。今年は、永井隆の生誕110年にあたることから、その生い立ちや生き方をみていくことで、永井の平和への思いについて考えることができるような展示構成とした。

永井隆は島根県雲南市三刀屋町の出身で、旧制松江中学・松江高等学校卒業後に長崎医科大学へと進学・就職し、放射線物理学の研究中であった1945(昭和20)年8月9日原子爆弾の被害にあい重傷を負った。永井は被爆前から白血病を患っており、被爆後症状はさらに悪化していったが、その中でいくつもの著書を出し、世へ平和の大切さ・尊さを訴え続けた。そしてそれらの一部は旧制松江高等学校図書館にも自筆入りで寄贈され、現在当館の貴重資料室にて保管されている。今回は、それらの資料に加え、雲南市永井隆記念館より資料や画像データを借用し、関連図書も含めた合計約94点を展示した。

関連イベントとして、2回にわたって開催したギャラリートークでは、担当職員により展示について解説を行った。本稿では、これら一連の企画展および関連イベントについて報告する。

2. 企画展示について

2.1 企画展の概要

本展は、2018(平成30)年7月20日から同年8月31日まで、島根大学附属図書館本館1階展示室にて開催した。展示室は当館の開館時間にあわせ、平日は8時30分から21時30分まで、土日祝日は10時から17時30分まで開室した

(夏季休業期間中は平日のみ9時から17時まで開室)。開室期間は合計33日間で、入場者数は800人に上った²⁾。

2.2 開催の趣旨

鳥根県、特に雲南市では永井隆の幼少期を過ごした町として顕彰活動が盛んである³⁾が、「永井隆」＝「平和を」という表象のされ方が多く、長崎出身である筆者にはずっと違和感があった。もっと具体的に言えば、長崎で感じていた「永井隆像」と、鳥根での「永井隆像」にギャップがあり、今回この企画展を通してそのギャップを埋めることができると考えた。それはつまり、永井隆がどのような人物で、どのような生い立ちであったのか、その言動も含めて、現在彼についてどのような議論がなされているのかを提示し、来場者へ「永井隆像」を再考してもらおうことであった。

先人の顕彰とは、地域住民（あるいは組織の構成員）の募金や時には税金が投入されることもあり、その活動の性格上、その人物への理解が一面的であってはならない。その人物をより深く理解したうえで、地域住民（あるいは組織の構成員）の広範な合意があってなされる活動であることが前提であろうと考えるからだ。永井隆は、その言動に関して学術上様々な議論があり、ひとまずそれらを理解することから始めたい。

2.3 企画展の核となる議論について

永井隆は、確かに戦後、平和を訴えていくつもの作品を発表した人物であるが、その言動については現在も議論されている。本節ではそれを紹介する。1945（昭和20）年11月23日、浦上のカトリック信者による原爆犠牲者の合同追悼祭が行われた。永井は信者総代として弔辞を読んだ。当時、「原爆は天罰なのだ。神は我々の罪を罰したもうて我々の家族を殺し、教会さえ焼きたもうた。」と説く人がいたが、永井は

「終戦と浦上潰滅の間に深い関係がありはしないか。世界大戦争という人類の罪悪の償いとして日本唯一の聖地浦上が犠牲の祭壇に屠られ燃やされるべき羔^{こひつじ}として選ばれたのではないのでしょうか。

…信仰の自由なき日本に於て迫害の下四百年殉教の血にまみれつつ信仰を守り通し、戦争中も永遠の平和に対する祈りを朝夕絶やさなかった

わが浦上教会こそ神の祭壇に献げられるべき唯一の潔き羔ではなかったでしょうか。この羔の犠牲によって今後さらに戦禍を蒙る筈であった幾千万人の人々が救われたのであります。

…平和の光さし出づる八月九日、此の天主堂の大前に焰を上げたる嗚呼大いなる燔祭よ！…あの日、あの時この家で、なぜいっしょに死ななかつたのでしょうか。…私たちは罪人だからでした。今こそしみじみ己が罪の深さを知らされます。私は償いを果たしていなかったからのこされたのでした。」⁴⁾

と述べ、この弔辞により多くの信徒が励まされた。この永井の言葉は、後述するように長崎の戦後を考えるうえで大いに議論されることとなる。

広島は、三角州でおおむね平坦な地形である。広島での原子爆弾は市の中心部に落とされたことから、その被害は広く市街地全域に及んだ。一方で、長崎での原子爆弾は浦上という長崎市街地より北に位置する、山あいの集落に投下された。

その複雑な地形は、同じ市内であっても場所によって原爆被害の程度の違を生じさせた。例えば浦上にほど近い長崎駅では凄まじい破壊力で建物等は全壊全焼しているが、さらに南に位置する長崎市街地や国宝・大浦天主堂を擁する南山手の地区などの被害は、爆風による窓ガラスの破損など建物被害はあったものの焼失を免れた(図1)⁵⁾。

被害の程度に差があることや市街地の被害が比較的大きくなかったことは、その後の原爆についての考え方や態度で、長崎市民の間に温度差や時には対立をも生じることになった。「原爆は長崎ではなく浦上に落ちた」「お諏訪さん(諏訪神社)が原爆から守ってくれた」などと市民の間で公然と言われるような被爆直後の状況が、永井の発言の社会的背景として存在していた。

また、永井は原爆投下後の救護活動を記した『原子爆弾救護報告書』の末尾に、原子爆弾という「新しい動力」について「明るい希望」として、「原子爆弾を生み出した科学技術を神に与えられたもの」として賞賛している⁷⁾。

カトリック教徒でもあった永井は、先述したように原爆投下を「神の御摂理」と解釈し、さらに、原爆死没者を「汚れなき小羊はんさいの燔祭(=ホロコースト)」、生き残った被爆者は「神が与えた試練であり、神に感謝」すべきと説いていた。長崎大学名誉教授の高橋眞司はこの永井の考えを「浦上燔祭説」と提起

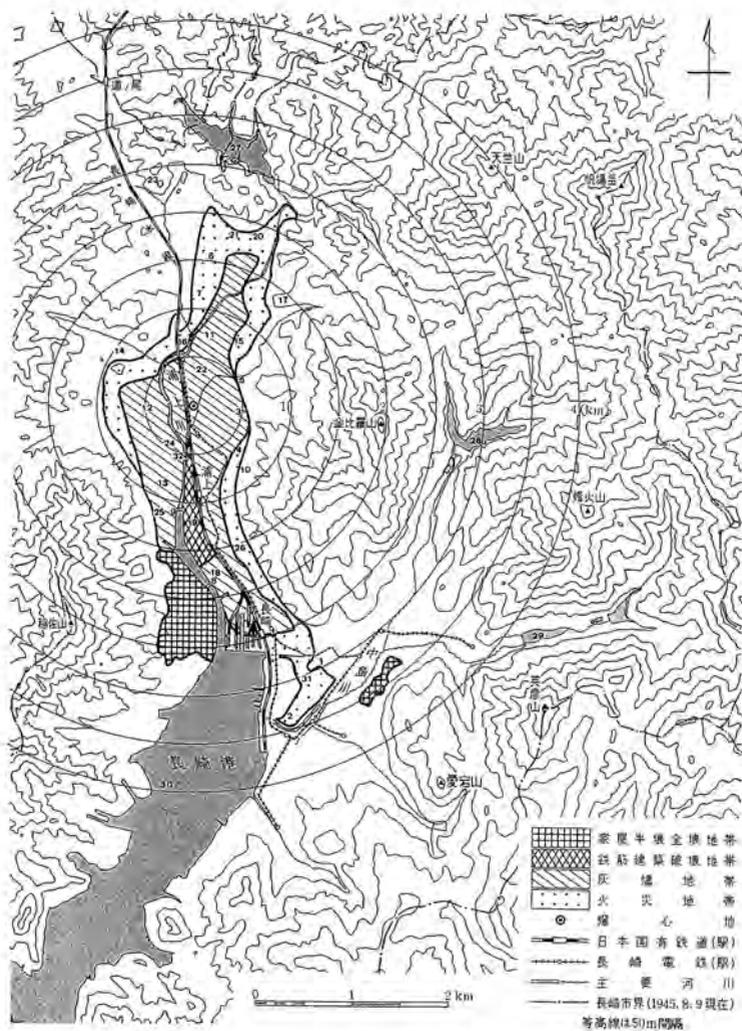


図 4.5 長崎市の建物検査状況

図 1 長崎市街図⁶⁾

したが⁸⁾、この「浦上燔祭説」は、次のように論評されることとなる。

1960年代に秋月辰一郎（医師）が「ついていけない」と述べたり、また1970年代には山田かん（被爆者、詩人）などから批判されたりなどした⁹⁾。山田かんは永井隆の浦上燔祭説は「反人類的な原理をおおい隠すべき加担にほかならなく、民衆の癒しがたい怨恨をそらし慰撫する、アメリカの政治的発想を補強し支えるデマゴギー」と批判した¹⁰⁾。また、1980年代に井上ひさしも、「永井説によればアメリカの原爆投下を正義の行いであったと強弁でき」、「神の摂理をもちだせば人間世界から責任者を出さずにすむわけだ。為政者にとってこんな都合のいい話はない」と批判した¹¹⁾。

高橋眞司は著書『長崎にあつて哲学する－核時代の死と生』（北樹出版、1994年）などにおいて、永井説は戦争責任と原爆投下の責任を免除することになり、かつ、原子爆弾そのものの肯定につながるとして批判した。また永井が反共主義者であったことも指摘したうえで、戦争責任や原爆投下の責任の追及をしないままに、戦争を引き起こしたのは「私たち自身である」としたことは、結果としてアメリカ政府・GHQ・日本政府の思惑にかなうものであった、と述べている。そして永井が持てはやされるかたわらで被爆者の声はかき消され、被爆者援護は大きく立ち遅れることになった、と述べている。

これに対して、片岡千鶴子（長崎純心大学学長）は、原爆死没者を冒瀆することにもなりかねない「原爆天罰論」を排する目的で信徒に向けられた信仰上の発言であつて、政治的文脈にからめて論ずるべきではない、とし、永井に戦争責任を考える余裕があつただろうか、と高橋らの批判は非現実的だと反論した¹²⁾。

また、本島等（元長崎市長）は、江戸時代から連綿と続いてきたキリシタン（キリスト教信者）への迫害・差別・弾圧の果てに原爆の被害を受けて浦上の信徒は苦しみのどん底にあつたが、同時に太平洋戦争が終わつたことで初めて信教の自由が得られたのであり、信徒を激励し皆が一致して教会を再建するためには永井はそのように言うしかなかった、としている¹³⁾¹⁴⁾。

これらをふまえて、近年、四條知恵が浦上の住人への丁寧な聞き取り調査をもとにまとめた著書『浦上の原爆の語り：永井隆からローマ教皇へ』（未来社、2015年）において、長崎における原爆被害の表象全般に関わる問題と

捉えられてきた、永井隆の燔祭説の受容に着目し分析を行っている。

四條は、占領期の浦上において、燔祭説が原爆の語りとして支配的な位置を占めており、浦上のカトリック集団において燔祭説をめぐる語りは、地域に根差した集団の中でこれまでの歴史的理解に沿って集団の存在意義を強め、集団を構成する人々の間に入った「ひび」を統合し、ひいては集団自体を生み出していくという意味、そして力を与えるものだった、としている。しかし、被爆者が高齢化し、社会状況が変化する中で、かつて緊密な結びつきを誇った浦上の地域共同体の結束は弱まるとともに、燔祭説の役割も薄れていった。そんな中、1981（昭和56）年のローマ教皇ヨハネ・パウロⅡ世の来日を画期として現れた教皇の発言¹⁵⁾をめぐる原爆の語りは、原爆被害の悲惨さ、残酷さを訴える周縁化された語りを掬い上げる役割を果たし、支配的な語りとして受け入れられていった、とも述べている。

このように四條の論では、浦上における永井の燔祭説の受容が解明されているが、一方で浦上という極めて限定的な地域しか言及がなされていない。永井の言説がどのように長崎市民に受容されていたのかを歴史学的に解明するためには、浦上外の被爆地、特に城山地区など、仏教その他の宗教が存在した被爆地全域を含めたさらなる調査・研究と、これらをもとにした広範な議論が求められている¹⁶⁾。

2.4 準備と構想

今回の企画展の構想としては、永井隆に絡めて様々なテーマを提示したいと考えた。まず、先述した永井隆の言説についての議論が第一点であるが、第二点目としては、永井の生まれた旧田野医院に関連した、歴史的建造物の保存問題についての紹介である。

2013（平成25）年に永井隆の生誕の地であった松江市苧町の旧田野医院の一部が解体されるという事があった。その話や解体前に撮影された画像データなどがあることを、本学の名誉教授である竹永三男先生からご教示いただいており、いつか展示で紹介したいと考えていた。

旧田野医院は、洋風建築の様式を兼ね備えた木造2階建て建築である。建物は本館・中門とあり、永井隆の両親が住んでいたのは中門の部屋であった。この建物は1873（明治6）年に創設された私立苧町病院であると考えられて



図2 旧田野医院中門

おり、亭町病院として使用されていたこの建物は1886（明治19）年に田野俊貞博士¹⁷⁾が所有し、安任堂田野医院が開設された。この医院は産婦人科医院として長く親しまれ、敷地内には永井隆が誕生した際に産湯として使用した井戸も残されていた。現在は松江市の所有となり、本館のみ現存している。このように由緒ある歴史的建造物の管理・保存をどのように行っていくかという問題は、松江市白潟本町の出雲ビル（松江市登録歴史的建造物第1号）、初代松江警察署庁舎（解体保存）にみられるように、市民にとっても課題であり、広範な市民の議論が待たれるところである。

第三点目は、長崎の被爆の実相についてである。島根の人々は地理的に近い広島の前爆被害については知っているが、長崎の被爆の実相についてはあまり知らないというのが、こちらへ住んでみて感じたことだった。そこで、長崎に投下された原爆そのものや、投下された経緯・その被害など、詳細なデータも含めたパネル解説を行った。

永井に関して展示を行うのであればいずれも外せないと考えていたが、結果として相互補完的な内容となり、より充実させることができたように思う。

以上の構想をもとに、準備を進めることとなった。準備に関しては、事前調査として雲南市永井隆記念館を訪ね、展示に使用したい資料をピックアップし、借用の依頼をした。ちょうど同記念館は建て替え工事のため休館が目前に迫っており、慌ただしい中にもかかわらず快く対応していただいた。大

型の額に展示されていた絵葉書や書簡といった借用できない資料に関しては画像データを提供いただいた。

旧田野医院の展示に関しては、先述したように竹永名誉教授から画像データを提供いただいた。これに関しては、事前に画像を展示に使用して良いか、当時撮影時に対応された田野家の田野博子氏にも連絡を取り、了解を得た。また、田野家が解体される際に記念に作成した田野家写真集（非売品）を竹永名誉教授から借用し、展示することができた。

また、第三点目の長崎の原爆被害についての展示は、関連図書の所蔵が当館にあまりなかったため、筆者の私物9点を展示に使用した。

2.5 展示内容

展示は、14枚のパネルとこれに対応する形で資料を紹介した。

- 一、「永井隆年譜」では、永井の生い立ちを年表にまとめ紹介した。
- 二、「永井隆誕生と田野家」では、永井隆が松江市苧町の田野医院にて生誕したことや、田野家との関わりについてパネル1枚にまとめ解説した。ここでは、雲南市永井隆記念館所蔵の田野熊一宛書簡（画像）についても展示を行った。
- 三、「コラム 田野家住宅（旧田野医院）」では、永井が生まれた田野医院について田野家と建物について紹介し、由緒ある歴史的建造物の管理・保存について述べた。また、解体前の風景を撮影したものを、田野家の写真集とともにケース展示した。
- 四、「学生時代～旧制松江中学・松江高等学校～」では、永井の旧制松江中学・松江高等学校（以下、旧制松高）時代の様子を当時のアルバム（当館所蔵）や写真を交えて紹介した。また、ここでは永井が旧制松高で初めてキリスト教と出会ったことについて、松原武夫教授との書簡（雲南市永井隆記念館所蔵）のやり取りからうかがえることも述べた。
- 五、「長崎医科大時代」では、長崎医科大学へ進学し、母の臨終の際に靈魂を感じたことや、長崎・浦上でキリシタンの信仰をも守る「帳方」との縁が深い森山家との出会いなどについて述べた。また、放射線医学を専攻し、診療で放射能の過量照射を招いたことなどから慢性骨髄性白血病となったことなどをパネル2枚にわたり紹介した。



図3 展示室中央ケース付近の風景



図4 展示室風景

- 六、「原爆とその被害」では、原爆についての解説と、長崎の原爆被害について詳細なデータを紹介し、通常の爆弾とは違った被害について解説した。
- 七、「長崎原子爆弾について」では、長崎に原爆が投下された経緯や、広島型原爆との違いについて解説を行った。
- 八、「被害の状況」では、原爆投下時の浦上地区の様子や、被爆の実相について解説した。特に、後者では被爆者である下平作江氏¹⁸⁾の手記を取り上げ、生き残った被爆者もケロイドや放射能障害などにより、様々な差別や偏見と向き合わざるを得なかったことを述べた。
- 九、「被爆後」では、永井の被爆直後の救護活動や終戦後の講義・講演・執筆活動について解説し、永井が、自身の住む浦上という社会の共同体の一人として、大学、教会、長崎、ひいては日本の復興を、そして世界に平和を確立するために、書くことでこれらに寄与できると考えていたことなどを述べた。
- 十、「浦上での再建と療養」では、まず終戦後、浦上で行われたカトリック信者による合同慰霊祭での弔辞において、永井が述べた「原爆投下は神の御摂理」とする考えを紹介し、その後、浦上での再建・療養について述べた。
- 十一、「永井の死」では、1951（昭和26）年5月に息を引き取った永井の死について述べた。また、長崎市公葬の様子を写した写真を、雲南市永井隆記念館から借用し展示した。
- 十二、「現代における永井の語り～永井の言説をめぐって①～」では、現代において永井の言説の評価が割れていることについて解説を行った。長崎市内で原爆被害の程度に差があり、長崎市街地の被害が比較的軽微であっ

たことが、のちに原爆についての考え方や態度で長崎市民の間に温度差や対立を生じることとなったなどの社会的状況があったことを解説した。そのような中での永井の原爆に対する考えや発言について、否定的な意見があることを述べた。

十三、「現代における永井の語り～永井の言説をめぐって②～」では、永井の言説を肯定的にとらえる意見を紹介したうえで、近年浦上地区の丹念な聞き取り調査をもとに永井の燔祭説の受容についてまとめた四條知恵の著書を紹介した。ここでは、四條の研究によって浦上地区における永井の言説の受容についての解明はなされたが、浦上地区外の被爆地域も含めたさらなる調査・研究が必要であることを述べた。

以上がパネル展示の紹介であるが、展示室の中央に置いた展示ケースでは、当館で所蔵している永井隆自筆サイン入りの寄贈本や、このたび当館の書庫から発見された永井隆寄稿収録の雑誌『聖母の騎士』も数点展示した。

以上のようなパネル・資料展示により多面的な「永井像」を提示し、来場者が改めて「永井像」について再考する機会とした。

2.6 広報

広報活動としては、事前広報として企画書・ポスターが出来上がった段階で、本学の企画部企画広報情報課を通じてマスコミへの周知を図った。結果、テレビ局が2社取材に来て、1社は後日報道された。このほか、以前別の企画展などで名刺をいただいた新聞各社の記者にメールで企画展の案内を出した。後日地方紙を含む3社から取材を受け、紙面に掲載された結果、多くの市民の来場にもつながった。

チラシやポスターについては、館内での配布・掲示のほか、大学構内のデジタルサイネージ（大学正門、メインストリート）も活用して案内を流した。また、地域の公民館や公共図書館へも送付し配布や掲示をお願いした。

2.7 アンケート結果

来場者にアンケートをお願いした。方法としては、出入口付近にアンケート用紙を置き、記入してもらおうというもので、近くに回収箱も設置した。その結果、45名からの回答が得られた。これまでの「戦争と平和」展の中では、

一番多い回答数となった。

アンケートの回答者を見てみると、年齢層としては50代が13人と一番多く、次いで60代が8人、40代と70代が7人ずつとなった。また、居住地は松江市内が圧倒的に多いが、中には雲南市からの来場者もあった。また、回答者の身分だが、一番多かったのは市民(27人)であり、次いで本学教職員(11人)、学生(6人)となっている。ここからは、市民の企画展への関心がより高いことがわかる。

次に来場目的の項目をみると、企画展観覧が目的で来館した人は29人、図書館利用やその他のついでであった人は15人であった。企画展が一般市民を図書館へ誘う装置として成功しているとみてよいだろう。

また、本展をどのように知ったかという項目では、学内の掲示・チラシが15人と一番多く、次いで知人からの口コミが10人、その他(学内一斉メールほか)、新聞といった順になっている。ここからは、広報活動として学内への掲示や一斉メールが有効であることと、口コミや新聞記事などを活用した学外への情報発信が大切であることがわかる。

展示内容については、「大変良かった」が30人、「良かった」が14人、「普通」が1人と、概ね好評であった。コメントは、「よく調べられ、よくまとめられており、大変分かり易かった」という趣旨の内容が多かったが、一方で「もう少したくさん展示物があれば」、「松江や島根大学と永井の関係がもっと知りたかった」という声も寄せられた。

印象に残った展示として「永井隆の「原爆」とそれをめぐる批判」や「浦上燔祭説の検証」といった、永井の言説をめぐる最後のパネル展示を挙げた回答者が多かったことは、永井という人物像について多角的な見方があるのだということ、ある程度提示できたという感触を持った。

最後に、今回の展示内容についての意見・感想を聞いた項目では、「永井の言説についての意見を多角的に示した展示は、来場者が言説について考える上でとても役立つと思います。(教員)」、「様々な視点から永井さんについて知ることが出来てよかったです。パネルの文章も大変わかりやすく、もっと学生にも広まってほしいと思いました。(学生)」といった好意的な意見をいただいた。また、「この種の企画をつづけておられる姿勢に敬意を表します」といった、これまでの継続的な企画展の開催について評価していただいたコ

メントや、「永井隆・長崎の被爆が島大生にどのように受け止められてきたか、その展示を加えればさらに広い学生に自分たち（に近い）問題として感じ考えてもらえるのではないか。例えば、これら（永井隆・長崎の被爆）に関する卒業論文の調査と展示など、展示自体としても大学附属図書館としても重要と思います。」といった、筆者や当館にとってさらなる課題も与えていただいた意見もあり、大変貴重なアンケートとなった。本稿末尾に、別図としてアンケートの集計結果も掲載している。

3. 関連イベントについて

3.1 関連図書の展示

本展の開催にあわせ、関連する図書の展示を行った。毎年職員へ呼びかけて本を紹介してもらい展示しているが、今年は25冊の図書を展示した。

3.2 ギャラリートーク

過去の企画展では、ギャラリートークとして戦争体験を聞く機会を設けてきたが、今回の展示ではパネルや借用した永井の資料について丁寧な解説も重要と考えたため、企画展の担当をした筆者が2回にわたり解説を行った。

第1回目（7月31日）は試験期間中の開催であったことともあり参加者のほとんどが学外者であったため、参加者からは「なぜもっと若い人が来ないのか」といった声も聞かれた。2回目（8月6日）は試験終了後に開催した。



図5 ギャラリートーク風景

両日あわせて14人の参加があり、来場者は熱心にメモを取るなど話を聞いていた。

また、これとは別に知り合いの教員に依頼され、個別にギャラリートークを行った。こちらはカトリック教会の方々で、永井について事前に勉強されており、ギャラリートークの際も積極的な質疑応答がなされ、その熱心さが伝わってくる会となった。

4. おわりに

最後に、今回の企画展で得られた成果と今後の課題について述べたい。

今回の企画展の趣旨として、多面的な「永井像」を提示し、来場者が改めて「永井像」について再考する機会としたいというねらいがあった。これについては、アンケート結果や実際の来場者の感想からも分かるように、一定の成果は得られたように思う。

また、これは毎年の課題であるのだが、学生の来場が少なく企画展の手法に毎回悩むところである。しかし、今回アンケートに寄せられた「学生が受け止めてきた『戦争と平和（今回は永井や長崎原爆）』や卒業論文の調査・展示」など、今後の展示の在り方につながる意見・感想が寄せられたことは本展の収穫である。

他にも、今回雲南市の永井隆記念館と資料の借用を通じて関係が築けたことは、大きな収穫であった。企画展にも、藤原重信館長はじめ雲南市教育委員会の方も来場いただき、当館の所蔵資料を見ていただく機会ともなった。今後は、新しくなる永井隆記念館とも資料の貸借等を通じて連携できればと考える。

今回、展示を通して「永井隆像」という一般的な語りの中での「表象」だけでは、学術的な論点となっている彼への評価を正視することが出来ないこと、そしてそのような語りを安易に顕彰化されることへの危惧を提示したつもりである。確かに永井の功績やその発言は、戦後の浦上カトリック信徒にとって評価されるものであったことは違いないが、まさにその永井の言説がもたらした表象によって、反原爆の思いを胸の中に抱え込まざるを得なかった人々がいたであろうことは、高橋の論に首肯せざるを得ない。

それでも、永井のすべてを否定的にとらえるのではなく、彼の研究や医学

への姿勢、原爆投下直後における救護活動など、後世に伝えたい／本学の学生に伝えたいところは丁寧に、このような機会を通じて今後も紹介できればと考えている。

付記

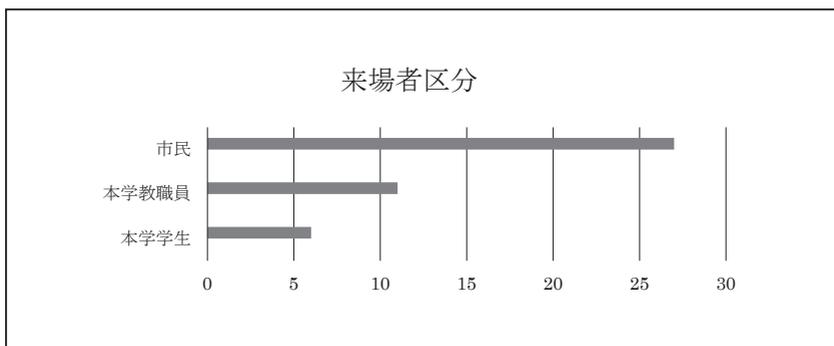
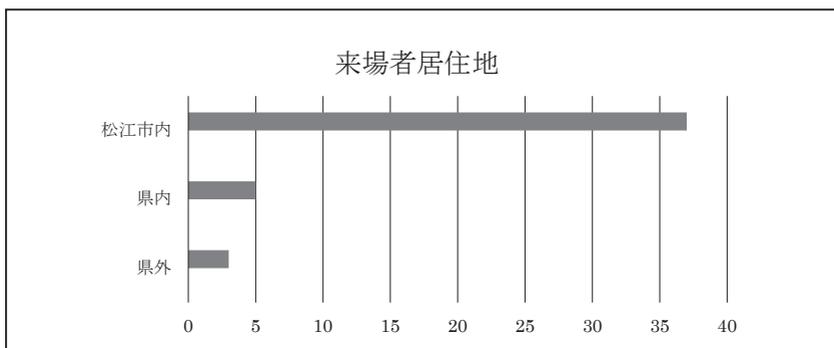
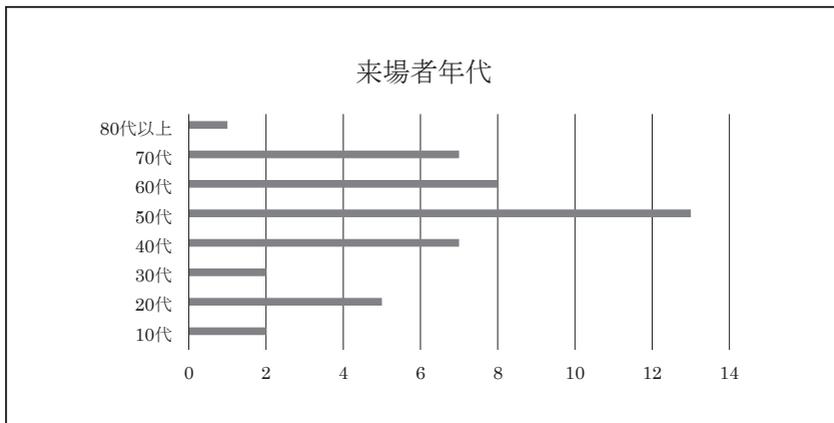
企画展を開催するにあたり、当館の情報サービスグループのスタッフからは様々な協力があつた。また、貴重な資料を快く提供いただいた、雲南市永井隆記念館館長藤原重信氏はじめ、雲南市教育委員会の方々、田野博子氏、竹永三男名誉教授には大変お世話になった。記して御礼申し上げる。

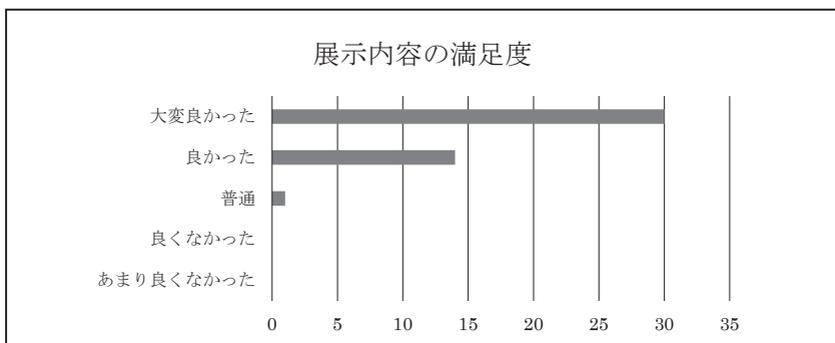
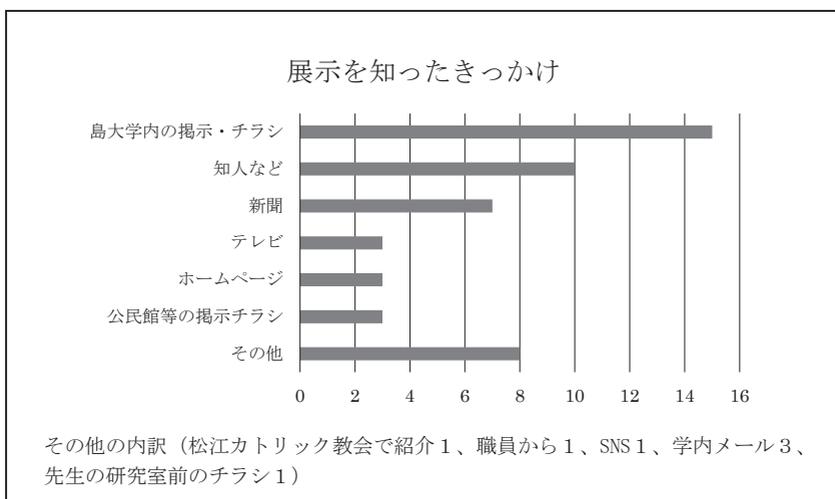
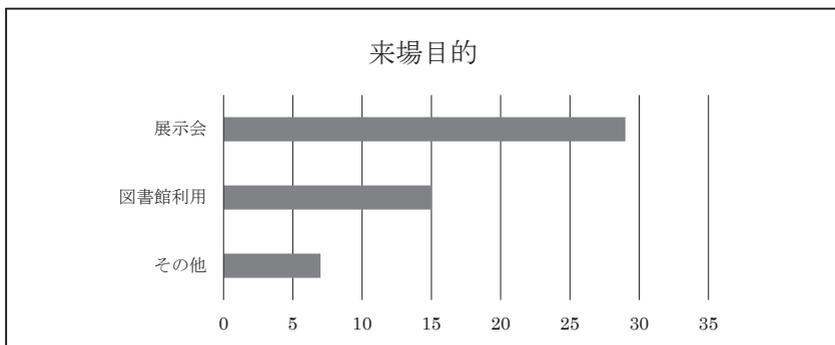
注

- (1) 過去の企画展については、拙稿「大学図書館がつなぐ「地域」と「戦争・平和」：企画展「戦争と平和を考える2014」より」（松雲：島根大学附属図書館報 17、2015年）および「2017年度島根大学附属図書館企画展示「戦争と平和を考える2017—記録された戦争体験—」実施報告」（松雲：島根大学附属図書館報 20、2018年）をご覧ください。
- (2) 入場者数については、入り口に赤外線カウンターを設置し、計測を行った。
- (3) 島根県雲南市三刀屋町には、永井隆記念館が1970（昭和45）年に建設・竣工された。これは、永井の母校である飯石小学校区の有志から、「明治100年を記念し郷土の偉人永井隆の顕彰碑を建設したい」という申し出が三刀屋町に対してあり、それが「記念館」建設へと発展したものだ。現在は施設整備のため休館中であり、2020年4月末に再開の予定である。詳しくは雲南市HPを参照のこと <https://www.city.unnan.shimane.jp/unnan/kankou/spot/iseki/museum07.html>、（参照2018-12-24）。このような施設のほか、「“平和の使徒”永井隆博士の精神を、未来を担う若い世代に伝え、人類普遍のテーマに取り組む機会と出会いの場を提供し、明るい日本の未来づくりに期する」永井隆平和賞を毎年募集し、優秀作品を表彰しているなどの顕彰活動を行っている。
- (4) 片岡弥吉『永井隆の生涯』中央出版社、1961年
- (5) その被害については、長崎市編『長崎原爆戦災史』第1～5巻（長崎国際文化会館、1977年～1984年）などが参考になる。
- (6) 広島市長崎市原爆災害誌編集委員会『広島・長崎の原爆災害』岩波書店、1979年
- (7) 永井隆『原子爆弾救護報告書』1945年
- (8) 高橋眞司『長崎にあって哲学する—核時代の死と生』北樹出版、1994年
- (9) 岡本洋之「永井隆はなぜ原爆死が神の摂理だと強調したのか？」（『教育科学

- セミナー』第42号、関西大学教育学会、2011年)
- (10) 山田かん『長崎原爆・論集』本多企画、2001年
- (11) 井上ひさし『ベストセラーの戦後史1』文藝春秋、1995年
- (12) 片岡千鶴子「永井隆と『長崎の鐘』—被爆地長崎の再建—」(長崎純心大学博物館磯村平和文庫編、片岡千鶴子・片岡瑠美子編『被爆地長崎の再建』同博物館、1996年ほか)
- (13) 本島等「浦上キリシタンの受難—禁教令、四番崩れ、原爆—」(『聖母の騎士』2000年10月号、聖母の騎士社)
- (14) いずれも岡本洋之前掲論文より引用
- (15) 「戦争は人間のしわざです。戦争は人間の生命の破壊です。戦争は死です」(広島市の平和記念公園にて行った「広島アピール」、1981年2月25日) や、「皆さんがきょうまで耐えてこられた苦悩は、この地球に住むすべての人の心の痛みとなっています。皆さんの生きざまそのものが、すべての善意の人に向けられた最も説得力のあるアピール——戦争反対、平和推進のため最も説得力のあるアピールなのです。」(恵の丘長崎原爆ホームで述べたメッセージ、1981年2月26日) などの発言。
- (16) 四條の論については、黒川伊織「四條知恵著『浦上の原爆の語り：永井隆からローマ教皇へ』(特集 ブックレビュー「戦後70年」『原爆文学研究』15、花書院、2016年)も参考になる
- (17) 田野俊貞は、1855(安政2)年栃木県足利市生まれ。1884(明治17)年に鳥根県医学校教諭、松江病院長として赴任したが、1886(明治19)年には医学学校廃校により辞任し、その後松江市苧町の現在地に安仁堂田野医院開業した。
- (18) 下平作江は、1935年(昭和10)1月1日中国(旧)満州国遼陽市生まれ。1940年(昭和15)両親が遼陽市で殺害され、長崎市の親戚の家にひきとられた。長崎市駒場町(現松山町)に住んでいたが、城山国民学校5年生のとき(1945年)爆心地から800メートル地点で被爆。被爆後は養父・瀧川勝のもと、当時戦災者と称していた被爆者を中心とした互助組織であった長崎戦災者連盟や、後の被爆者運動にも関わった。被爆体験を語りつづけて今日に至る。講話回数は1万回を超えた。長崎原爆遺族会顧問。下平から聞き取りを行って明らかにした長崎戦災者連盟の活動については、拙稿「長崎被爆者運動と戦災者組織(特集 原爆投下と被爆者)」(『戦争責任研究』74号、日本の戦争責任資料センター、2011年)を参照。

別図 戦争と平和展 来場者アンケート結果集計







本学教員が関わった本

山陰研究ブックレット7 地域とつながる人文学の挑戦：山陰の 文学・歴史学・考古学研究から考える

板垣 貴志 [ほか] 著
今井出版、2018年3月

紹介者

田中 則雄
(法文学部山陰研究センター長)

島根大学法文学部では、「山陰研究センター」を拠点に、地域再生・エネルギー問題・歴史・文学など、地域課題の研究を続けている。

さて、2015年6月、下村博文・文部科学大臣（当時）は、各国立大学長に向けて通知を出し、教員養成系と、人文社会系の学部・大学院について、「18歳人口の減少や人材需要」等を踏まえて、「組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組む」ことを求めた。この通知は「文系不要論」と受け取られ、早速、国立大学法人十七大学人文系学部長会議（島根大学法文学部も所属）、日本学術会議の幹事会、さらには経団連などからも、反論や批判的意見が表明された。

当の文系学部側も、しっかりとした根拠を示しながら自分たちの存在意義を言明していくことが求められ

ることとなった。かくして山陰研究センターでは、2017年7月、人文社会系学部の存在意義を「地域」との関わりという観点から考えるシンポジウムを開催し、その内容を元に本書を刊行した。

第1章（板垣貴志／法文学部）では、鳥取県伯耆町・矢田貝家での、研究者と地元住民と一緒に古文書を解読する「住民参加型」調査を取り上げる。住民には、研究者の知らない地元の地名・人名・慣習などのことがわかるので、その知識と、研究者の知見とを合わせながら解読していくと、今から約90年前の人の動き、物の動きが鮮明に再現されてくる。

第2章（野本瑠美／法文学部）は、島根県の出雲大社近くに江戸時代前期から続く手銭家の資料に関する取り組みを紹介する。山陰研究センターの研究プロジェクトにより、江

江戸時代・大社の人々が、和歌・俳諧を熱心に学習し、創作を行い、そのために人的ネットワークを形成していたことが解明された。いま地元大社町で実施している古典講座では、手銭家資料を題材に、そうした江戸時代の文芸活動を住民とともに追体験している。

第3章（田中則雄）では、鳥取県琴浦町の河本家（江戸時代の大庄屋）について、地元保存会の人々が、同家の住宅（江戸時代前期建築、国指定重要文化財）をはじめとする文化遺産を守りながら積極的に公開を進めていること、島根大学の研究チームが、この活動と協働しつつ、同家に伝わる古典籍（江戸時代から明治初期にかけての和装の書物）約4800冊の調査研究を続けていることを記す。

コラム（昌子喜信／附属図書館）では、河本家の古典籍を、島根大学附属図書館のホームページを通じデジタル画像によって公開する取り組みについて紹介する。

第4章（会下和宏／総合博物館）は、鳥根県の江の川流域が、先史時代以来の遺跡、文化財の宝庫であることを示したうえで、この一帯を一つのミュージアムと捉えて、研究者と市民と一緒に実地をめぐる活動を

行ってきたことを述べる。

第5章では、中国新聞社の林淳一郎記者が、2016年の連載記事「人文学の挑戦」について紹介。この連載記事は、中国地方の大学を中心に、文学・哲学・歴史学等の研究者や、出版など人文学と関係の深い業に携わる人々に密着取材し、人文学による真理の探究、その発信活動の様を鮮明に描き出すものであった。

本書はこのように、地域に入り込み、地元住民と一緒にやってきた研究活動について具体的に紹介した上で、以下のことを示そうとする。

——人文学、社会科学の大きな役割として、過去から現在に至る人間の営みの跡を掘り起こし、それを記録し、意味づけるということがある。とすれば、地域は、その生データが豊富に存在するフィールドであり、研究者はここに積極的に踏み込んでいくべきであろう。ローカルな素材を追究して普遍に到達する可能性は大いにある。

人文社会科学は、人間の多様な営みを研究対象とする。空間的に大きく拡がり、時間的に何層にも重なる、その中から立ち上がって見えてくるものこそ、人間がこれからどう生きるかを考える際の礎となり得る。この観点からも、地域とつながる研究

は大きな意味をもつはずである。

この1冊に紹介した地域とつながる研究活動や、またそこから私たちが到達した現時点での見解につい

て、多様なご意見をいただくことによって、今後もこの問題について考え続けていくための第一歩となることを願う。





本学教員が関わった本
世界の暦文化事典

中牧 弘允 編
丸善出版、2017年11月

紹介者

福井 栄二郎
(法文学部 准教授)

文化人類学者がフィールドワークを行う際、最低でも連続1年は現地に滞在しろといわれる。なぜか。どの文化も暦が1年ほどで1周するからである。つまり人間は1年をサイクルとして、同じ生活を繰り返して送っている。

2017年に『世界の暦文化事典』が刊行された。これは世界各地の暦に特化したユニークな事典だ。本書は9つの章から構成されていて、東アジア、東南アジア、南アジア、中央・北アジア、西アジア、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカ、オセアニアとなっている。つまり順を追って読むと、日本を起点に西回りで世界一周暦の旅を楽しむことができる。

暦法には大きく太陽暦、太陰暦、太陰太陽暦の三種がある。また花の開花、渡り鳥の飛来、そして雨季乾季などを指標とする自然暦もある。

太陽暦は太陽の運行（地球が太陽の周りを回る周期）に基づいた暦で、私たちにとって最も身近なグレゴリオ暦は、この太陽暦である。一方、太陰暦は月の満ち欠けの周期に基づいた暦である。現在では、イスラム暦（ヒジュラ暦）がその代表だろう。また太陰太陽暦は、太陰暦を基本として、そこに閏月を入れながら調節する暦である。中国の太陰太陽暦などがこれにあたり、19年に7回の閏月を入れて、暦と季節のずれを修正している。

こうした暦の上に、祝祭日や年中行事が据えられ、生活のリズムがつくられる。祝日はクリスマス、イースターなど宗教に由来するものもあれば、独立記念日など、特定の国家が制定するものもある。例えば日本の場合、「文化の日」は明治天皇の誕生日（天長節）、「勤労感謝の日」

は旧新嘗祭、「昭和の日」は昭和天皇の誕生日に、それぞれ由来している。年末年始の休みが長いのも日本だけの特徴で、キリスト教国ではクリスマスに、中国などでは春節（旧正月）に重きが置かれるので、年末年始はそれほど重要ではない。

本書のなかで、私は長年調査してきたバヌアツ共和国の項目を執筆した。この国独自の祝日として、例えば独立の父「ウォルター・リニの日」（2月21日）とか「伝統的チーフの日」（3月5日）、「独立記念日」（7月30日）などがある。またこの国はキリスト教国なので「聖金曜日」「復活祭（イースター）」「昇天祭」「聖母被昇天祭」「クリスマス」なども祝日として制定されている。こうした祝日には、首都で大がかりなパレードやイベントが行われることもある。

また暦は商品にもなる。美しい風景や伝統的な踊りの写真で彩られたカレンダーは、バヌアツの人気のお土産品だ（写真）。観光客は持ち帰ったカレンダーを眺めることで、楽しかった旅の思い出にふけることができる。悲しいことだが、お土産用カレンダーにおいては、暦の確認は二の次になってしまう。

他方、バヌアツの離島や村落部に

暮らしていると、大切なのはむしろ自然暦の方かもしれない。彼らはみな、タロイモやヤムイモなどを栽培する農耕民である。焼畑を耕作するためには、乾季から雨季への移り変わりを正確におさえおかななくてはいけない。また沿岸にトビウオの群れが舞い込む季節や、ウミガメが産卵する季節も重要だ。天気を読むことや季節の変化に気づくことは、彼らの生活には不可欠な能力である。彼らは日常生活のなかで、上手にグレゴリオ暦と独自の伝統的な暦を使い分けている。

この暦の複数性は、なにもバヌアツに限ったことではなく、日本に目を向けると「和暦」という独自の紀年法がある。もうすぐ30年以上続い



バヌアツの土産用カレンダー

た「平成」も終わろうとしており、新しい元号は「大化」以来、248番目の元号となる。「明治」「大正」「昭和」「平成」といったこの元号、日本人にとっては単なる時間の区切りである以上に、実は「時代」そのものではあるまいか。「昭和」といえば、第二次世界大戦から戦後復興、高度成長というこの国の一大転換期であったし、「大正ロマン」「平成の歌姫」など、その時代時代にうまくマッチした文化・風俗が存在した。グレゴリオ暦では、なかなかこうはいかない。

一方で、今、世界はグローバル化し、私たちの身近に外国人がいることはもはや珍しいことではなくなっ

た。私などは、どうしても隣人たちの習慣、風習に関心が湧く。中国の方々が盛大に祝う「春節祭」や、イスラム教徒たちの断食月「ラマダーン」などは、テレビなどで認知度も高まったが、これらもまた彼らの暦と密接に関連している。つまり彼らは日本で生活しながら、同時に別の暦を生きているのだともいえる。

この国にも、彼の地にも独自の生活実践があり、その一つ一つが独自の暦と結びついている。今、この瞬間に、異文化の人たちはどのような暦を生きているのか。私たちのものとは異なる暦を想像してみるのもまた楽しいだろう。本書はその大きな手助けをしてくれるに違いない。





本学教員が関わった本

清華簡研究

湯浅 邦弘 編
汲古書院、2017年9月

紹介者

福田 哲之
(教育学部 教授)

本書のタイトルにある「清華簡」とは、北京の清華大学が所蔵する、今からおよそ2300年前の中国古代の竹簡をさす。この竹簡は盗掘されて香港に流出し、2008年7月に清華大学に寄贈された。数量はおよそ2,000枚、夏・殷・周および春秋時代の故事や歴史などを記した六十篇以上の古代書籍からなり、その多くはすでに失われた古逸書であった。盗掘品のため出土地は不明であるが、炭素14年代測定および年輪補正によって、竹簡の年代は紀元前335年～紀元前275年の戦国時代中期後半と推定されている。寄贈後2年におよぶ保存処理と整理・研究を経て、2010年12月に竹簡の図版および釈文注釈を収録した報告書の第一分冊『清華大学蔵戦国竹簡(壹)』(清華大学出土文献研究と保護中心編・李学勤主編)が出版され、現在、第八分冊ま

で刊行されたところである。

本書はそのうちの第一分冊から第六分冊までに収録された竹簡を対象とし、編者の湯浅邦弘教授(大阪大学)を中心とする「中国出土文献研究会」のメンバー6名が2011年から2016年の間に執筆した論文(書き下ろしを含む)で構成される。本学からは筆者と同僚の竹田健二教授もメンバーの一人として執筆しておられる。

20世紀以降、中国古代にかかわる研究は文字通りの画期的進展を遂げ、現在もその状況は続いている。それをもたらしたのが「出土文献」と称される新資料の出現であった。ここで研究対象となる文献資料がどのように変化してきたかを大まかにたどってみよう。

19世紀以前における文献資料は木版による版本が中心であり、その年

代はおよそ11世紀から13世紀の宋代を上限とする。しかも宋代の版本すらきわめて希少であったため、宋版の書物を数多く所蔵していることが当時の蔵書家のステータスシンボルとなっていた。

そうした状況に変化をもたらしたのが、19世紀末に敦煌の莫高窟から偶然に発見された敦煌文書である。その数量は三万巻以上とも言われ、書写年代は4世紀の六朝期から11世紀初めの宋代にわたる。内容は仏教文献が中心であるが、儒教や道教の文献をはじめとする経史子集の広い範囲におよび、大量の古写本の発見は当時の学者を驚倒させ、「敦煌学」という新たな研究領域を形成するに至った。

20世紀に入ると西欧列強のシルクロード探検により、中国の辺境地帯から晋代・漢代の木簡が発見され、紙が普及する以前の木簡を資料とする研究がスタートした。これらの大部分は匈奴防衛線の軍事施設でやり取りされた行政文書が中心であったが、中華人民共和国成立後の20世紀後半になると竹簡に書写された書籍の出土が急増してくる。これらの竹簡は古代の墳墓の副葬品で、その多くはビルや鉄道などの建設工事がきっかけとなって発掘調査が行われ

たものであり、とくに70年代には、銀雀山漢簡（1972年出土）、馬王堆漢帛書（1973年出土）、睡虎地秦簡（1975年出土）など、紀元前3世紀から紀元前2世紀後半にかけて書写された秦漢の簡牘・帛書が相次いで出土し、世界的なセンセーションを巻き起こした。

戦国期の竹簡はすでに1950年代に出土していたが、数量が少なく保存状態もよくなかったため、十分に研究を進めることができなかった。70年代以降になると資料数が増加し、包山楚簡（1987年出土）、郭店楚簡（1993年出土）、上海博物館蔵楚簡（1994年購得）によって本格的な研究がスタートし、現在では出土文献研究における主要な領域の一つとなっている。

これらの戦国竹簡はいずれも紀元前4世紀後半の書写と推定されており、中国古代の思想家を例にとれば、韓非子や荀子が活躍する以前、ちょうど孟子と同じ時代に相当する。筆者が研究者として歩み始めた30年前は、秦漢の簡牘・帛書を用いた研究成果が陸続と発表されていた時期であったが、当時、さらにそれを遡る戦国竹簡を資料として研究を行う時代が到来しようとは夢想だにできなかった。

本書の研究母体である「中国出土文献研究会」は、1998年10月に浅野裕一先生（東北大学名誉教授）を中心に発足した「戦国楚簡研究会」を前身とする。振り返ればいつの間にか20年の歴史を刻んできたわけであるが、研究会ではその間、国内の研究集会において各自の研究成果を報告するとともに、ほぼ毎年のように戦国竹簡を所蔵する中国の博物館や大学を訪問して実見調査や情報収集を行い、中国や台湾で開催される国際会議で発表するなど、海外の研究者と活発な学術交流を重ねてきた。

その成果は、浅野裕一編『古代思想史と郭店楚簡』（汲古書院、2005年）、湯浅邦弘編『上博楚簡研究』（汲古書院、2007年）をはじめとする6冊の著作として公刊されている。

本書はこうした継続研究の一環として、2016年時点における清華簡の研究成果をまとめた中間報告である。続刊の第九分冊以降の資料とともに、新たに安徽大学が購得した戦国竹簡の公表も予定されており、今後さらなる研究の進展が期待される。





本学教員が関わった本
森林美学

H・フォン・ザーリッシュ 著
 ウォルター・L・クック・Jr. ほか英訳・解説
 小池孝良 ほか日本語版監訳
 海青社、2018年6月

 紹介者

高橋 絵里奈
 (生物資源科学部 准教授)

『H・フォン・ザーリッシュ 森林美学』は、もともとはドイツ語で書かれた本でした。第1版から第3版まであり、原著は装飾文字で書かれた美しい書物だと伺っています。その第2版の英訳版を日本語に翻訳したのが、本書となります。誰しも、どうして最新版の3版ではなく、2版で、それも英訳本の日本語への翻訳なのかということ疑問に思われるでしょう。英訳を担当したウォルター・L・クック・Jrとドリス・ヴェーラウ氏による巻頭言を読むと、第3版は入手困難であったとのこと、また、原著があまりに古い表現で、古いアルファベットで書かれ、翻訳が非常に難しかったことが述べられており、ドイツ語の原著の英訳は困難きわまりない作業であったことが述べられています。その困難を克服してようやく英訳本ができ

あがったとのことでした。難解なドイツ語の書籍が、英語に翻訳されたことで、ようやく多くの英語を解する人が読むことできるようになったということになります。その英訳本の日本語訳をすることになったのは、北海道大学の小池孝良先生のご努力の賜と私は思います。北海道大学では日本で唯一「森林美学」の講義が開講されており、その担当者が小池孝良先生でした。日本では、1918年に新島善直と村山醸造各氏によって『森林美学』が著述され、今田敬一氏によってドイツ林学の展開の中に森林美学の位置づけが明らかにされました。その今田氏によって恒続林思想へ導かれた北海道大学の「森林美学」の講義を受け継いだのが小池孝良先生ということになります。つまり、翻訳の旗振り役の適任者がおられて初めてこの翻訳が動

き出したということになります。日本語監訳者としては、小池孝良、清水裕子、伊藤太一、芝正己、伊藤精悟、各氏と錚々たるメンバーが並び、北海道大学の学生、信州大学のグループ、京都大学のグループなどを含む41名の翻訳者が分担で訳を担当しました。その41名の中の1人がこの紹介文を書いている私となりますので、私がこの本を紹介するのは、ちょっと恐れ多いことかなと思っています。英語の翻訳であれば、さほどの困難は無かろうと思われるかと思いますが、この翻訳の話が来て、担当部分が配分され、各訳者の原稿が出始めたのが2008年と記憶しています。全ての訳者の原稿が揃い、内容が精査され、用語などの訳が統一され、出版に至ったのは2018年6月1日ですので、翻訳に10年以上の歳月がかかった大作となりました。私は1998年に卒論のテーマとして吉野林業地の施業（森林管理）を選び、その後2007年に学位を取得し、現在に至るまで、森林管理の研究者として研究を行ってきました。私の研究のきっかけは、以下のような出会いがあったことに始まります。京都出身の私は、人工林といえば、身の回りにあった間伐遅れの暗いスギ・ヒノキ林でした。しかし、大学3年生

の秋、先生が奈良県の吉野林業地での森林調査補助のアルバイトを募集されていることを知りました。すばらしい人工林があるので、是非にと先生に勧められて吉野林業地に初めて行きました。吉野林業地での森林調査の際に、初めて「これは綺麗！美しい！」と思う人工林に出会いました。こんな美しい人工林はどのように育成されてきたのか、どのような方々が関わってこられたのか、とても興味が沸きました。そんなとき出会ったのが、吉野林業地の森林管理をされている林業技術者であり、間伐選木（森林内で伐るべき木と残す木を選別する）の熟練技術者である「山守」の^{やまもり} 塚^{ありづか} 忠一氏でした。私は単刀直入に「間伐選木の基準って何ですか？」と尋ねたのですが、塚氏は「まあ～長年の経験と勘ですなあ～。」と答えられました。普通ならば、「そうか～」と引き下がるどころかと思います。しかし、私は、そうは言っても、何かを見て判断されているはずだから、何を見ておられるかがわかれば、真似できることも有るのではなからうか、それを知りたい！と思いました。最初は大学生の娘さん（当時は！）が何を知りたいのかといぶかしがられていましたが、吉野林業地に通う度に森

林管理について熱心に尋ねる私に、埴氏はとても丁寧に森林管理の極意とも言える事柄を教えてくださいました。その後吉野林業地で多くの皆様に出会い、私の森林管理に関する興味は益々深くなりました。その埴氏に私は尋ねたことがあります。「埴さんにとって、美しい森林はどんな森林ですか？」埴氏は迷い無く「それは、人がちゃんと手入れをしている森林やなあ。」と答えられました。当時の私は驚きました。当時の私は人手の入らない自然こそ美しいに違いないと思っていたからです。人手が入っていることが美しいとは思っていませんでした。

この本の原著者であるH・フォン・ザーリッシュは、ドイツの森林官です。日本とは異なり、ドイツの森林官は地域の森林の管理の指揮を執るのみならず、警察権を持ち、森林内で犯罪者を捕らえることもできます。森林官はドイツの子供達にとってあこがれの職業なのです。その森林官であったH・フォン・ザーリッシュは、序文で以下のように書

いています。「林業芸術の目的は、経済的な森林管理を理想化することなのです。」「木材を利用することが目的ではなく、単に美と喜びのためだけに経営される森林は、林業芸術（または、クラウゼの言う森林芸術）には当てはまりません。」まさに埴氏がおっしゃっていた美しい森林と通じるものがあります。民藝運動を起こした柳宗悦が日用品に対して「用の美」があると言ったことにも通じるこの感覚は、国際的なものだったのか！と思いました。

この本はドイツの森林官が書かれた哲学書です。哲学書ですので、森林学を学んできた研究者にとっても、背景を全く知らない読者にとってもきっと難解ではあります。しかし、この本の中には宝物のような言葉がちりばめられています。美とは何か思いにふけりながら、自分にとって美しい森林とは何かを考えることができる良書です。



原稿募集

—『淞雲』原稿執筆の手引き—

1 編集方針

本誌は、島根大学附属図書館が編集・発行する雑誌です。本誌は、島根大学附属図書館の利用者である学生及び教職員を主な対象読者として、大学図書館及び図書館資料についての調査・研究成果や附属図書館の活動報告、資料紹介等を掲載します。学生や教職員の皆様からの投稿も広く受け付けます。

2 投稿規定

(1) 原稿の種類

島根大学附属図書館及び大学図書館、公共図書館など図書館に関する内容の調査・研究成果や活動報告、資料紹介等で、次の種類に該当するものとします。

論文	図書館及び図書館資料に関連するオリジナルの研究論文
報告	図書館業務・サービスに関連する報告、図書館資料に関連する報告（資料紹介など）
短報	本学教員自著紹介、書評、図書館に関連するショートエッセイ
その他	館長が必要と認めるもの

(2) 原稿の提出・問い合わせ先

電子メール本文に以下の必要事項を明記のうえ、次の提出先に提出してください。

・必要事項

- ①投稿希望（論文・報告・短報・その他 のいずれかを選択してください）
- ②投稿者所属および氏名
- ③論題（縦書き・横書き のいずれかを選択してください）

・提出先

島根大学附属図書館広報チーム（『淞雲』編集委員会）

e-mail: library@lib.shimane-u.ac.jp

TEL : 0852-32-6088 (内線) 2780

(3) 原稿の査読

本誌に掲載する記事は、内容に応じて編集委員会または、編集委員会が依頼する査読者による査読を行い、査読結果に応じて、著者に対して、原稿の修正、改善をお願いすることがあります。

(4) 著作権

本誌に掲載された記事の著作権は、著者に帰属します。ただし、本誌は冊子で発行するとともに電子版を公開するため、事前に電子化に伴う複製及び送信可能可並びに公衆送信を許諾していただきます。

(5) 校正

初校のみ著者校正をお願いします。

(6) 学術情報リポジトリSWANへの掲載

掲載された記事は、島根大学学術情報リポジトリSWANへ掲載し、インターネット上に公開します。

(7) 掲載原稿の取扱い

提出された原稿は、原則として返却しません。

(8) 謝礼

執筆者1名につき、掲載号1部とご希望により別刷り20部まで贈呈します。

3 原稿執筆要領

(1) 原稿の形式

原稿の本文はテキスト形式、MS-Word、または一太郎形式とします。

(2) 原稿の長さ

本文の長さは、記事種別に応じて、概ね次のページ数(図表、写真含む)に収まるようにしてください。

横書き：A4判 1ページあたり34文字×31行(1,054文字)

縦書き：A4判 1ページあたり25文字×20行×2段(1,000文字)

*刷り上がりはA5判となります。

論文・報告 4～20ページ以内

短報 2 ページ (短報の刷り上がりは横書き 2 段組になります)

(3) 原稿の書き方

- ①文章はわかりやすく、冗長にならないよう簡潔に表現してください。
- ②文章は「である」調、「です・ます」調のいずれでも可とします。内容にふさわしい文体としてください。
- ③章・節・項などの見出しをつける場合は、原則としてポイント・システムを使用してください。

例) 第 1 章 → 1

第 1 章, 第 1 節 → 1.1

第 1 章, 第 1 節, 第 1 項 → 1.1.1

項以下の細分 → (1)

- ④写真、図、表には、例のようにそれぞれ一連番号と簡潔なタイトルを付し、本文中に挿入するか、または、挿入箇所を明示して、別ファイルとしてください。本文中に図、表を挿入する場合においても、図、表は本文とは別ファイルとしてください。

例) 図 1 システム概要

表 1 メタデータ項目一覧

- ⑤文献を参照または引用した場合は、本文の該当箇所の右肩に、1), 2), 3) …のように一連番号を付して、本文末尾に参考文献・引用文献の書誌事項を記載してください。参考文献・引用文献の記載方法は、原則として「科学技術情報流通技術基準. 参考文献の書き方 (SIST02)」(URL http://sti.jst.go.jp/sist/handbook/sist02_2007/main.htm) に従ってください。
- ⑥他の著作物から転載する場合、及び図 (写真を含む)、表を使用する場合は、事前に著作権者の許諾をとって下さい。

2016.11.16改訂

淞雲

島根大学附属図書館報 第21号

2019（平成31）年3月25日 発行

編集・発行 **島根大学附属図書館**

本館 〒690-8504 松江西市川津町1060
TEL (0852) 32-6083 FAX 32-6089

医学図書館 〒693-8501 出雲市塩冶町89-1
TEL (0853) 20-2092 FAX 20-2095

印刷 今井印刷株式会社



島根大学附属図書館